

はじめに

お茶の水女子大学附属高等学校長 村田 容常

現代の日本社会を取り巻く環境は急速に変化しつつあります。世界レベルでも新たな問題の解決が迫られるようになってきました。科学技術の進展により地球全体で資源エネルギーが消費され、人的、物質的交流が激しく進んでいます。人類の活動が地球全体に与える影響も人類が初めて経験するレベルになっています。これらの環境変化に対応するために、日本の教育界にも、地球規模の視野で国際的な課題を発見・解決できる人材を育成することが求められています。そしてそのような人材を育成するためには高校段階から、問題探究並びに解決能力、幅広い教養、コミュニケーション能力、語学力などを高めることが求められるようになってきました。

このような背景のもと、本校は「女性の力をもっと世界に～目指せ未来のグローバル・リーダー～」という目標を掲げて平成 26 年度スーパーグローバルハイスクール (SGH) に指定され、事業を開始しました。本校は従来から小規模の女子校という特徴をいかして、社会に有為な教養高い女性の教育を目指し、生徒の自主自律を重んじ、課題研究型の教育を行ってきました。高大連携についても、SGH 指定に先駆け、平成 17 年度からお茶の水女子大学と、平成 24 年度からは東京工業大学との間で進めてきました。これらの長年の実績をさらに発展させ、女性グローバル・リーダーの基礎をつくろうという SGH です。今年度は 2 年目を迎えました。かなりの部分は順調に実施でき、生徒にも有益であったと思いますが、予定していた 2 年生のタイ・バンコクへの研修旅行が爆発事案により中止になるという、ある意味グローバル化の負の部分を経験することになりました。昨年の 8 月 17 日の夜爆発が起こったわけですが、8 月 20 日から 25 日にバンコク研修を予定していました。間一髪で危機が避けられたこととなります。また、8 月 12 日には中国で火災・爆発事故が起きましたが、その直後に天津市での研修(公益財団法人イオンワンパーセントクラブ主催「アジア・ユースリーダーズ 2015」)が予定されていました。こちらは爆発事故地から 50 km ほど離れていること、現地の状況から問題ないとの情報を得たことなどから予定通り参加しました。海外研修の危険性、グローバル化は功罪合わせ持つことを肌で感じた年になりました。本報告書には SGH 指定 2 年目に実施した成果を取りまとめましたが、2 年間実施した経験を踏まえて、より取組の実効性を上げるため一部手直しすることもしました。不十分な点は多々ありますが、ご批判を頂きよりよき教育システムの開発にいかしていきたいと思っております。

また、本校の SGH 事業推進のためご協力いただいた多くの関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、今後とも一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

目 次

<u>1 研究開発の概要</u>	4
1.1. 研究開発の概要	
1.2. 本年度の研究開発の経緯	
<u>2 課題研究グループの取組</u>	6
2.1. 必修科目	6
2.2.A. 1年次「グローバル地理」	
2.1.B. 2年次「持続可能な社会の探究Ⅰ」	
2.2. 選択必修科目	10
2年次 総合的な学習の時間「グローバル総合」	
2.2.A. 国際協力とジェンダー	
2.2.B. 経済発展と環境	
2.2.C. 国際関係と課題解決	
2.2.D. 情報技術と創造力	
2.3. 選択科目	18
2.3.A. 3年次「グローバル総合アドバンス」	
2.4. 研修活動	20
2.4.A. イオン アジア・ユースリーダーズ	
2.4.B. 台湾研修	
<u>3. 教養教育グループの取組</u>	31
<u>4. 連携・評価・発信グループの取組</u>	38
4.1. 取組の概要	
4.2. 生徒の意識調査（質問紙調査）の結果及び分析	
<u>5. 次年度以降の課題及び改善点</u>	44
関係資料	45
1. 目標設定シート項目の実績	
2. 運営指導委員会（第1回記録, 第2回要項）	
3. SGH 意識調査〔アンケート項目と集計結果（抜粋）〕	
4. 組織図	
5. 教育課程表	

1 研究開発の概要

1.1. 研究開発の概要

グローバルな社会的課題の発見・解決を目指して探究的な学習を行う、必修の課題研究「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」と、選択科目の「グローバル総合」、「グローバル総合アドバンス」、および確かな基礎学力と広い教養の涵養を目指す「教養教育」の教育課程の研究開発を行う。

1.2. 本年度の研究開発の経緯

指定2年目の本年度は、昨年度の取組の成果及び課題を検証し、SGH事業を本校の教育研究全般の中に位置付け、校内の実施体制、管理機関による支援体制、教育課程の変更など、様々な改善を図った。

校内の実施体制については、昨年度は推進班が研究開発全般を総括・推進し、課題研究グループ、教養教育グループ及び特別活動・環境整備グループが所管に応じて個々の取組の企画・実施を担う体制で事業を進めたが、より効果的かつ円滑に研究開発を進めるため、本年度は組織改編を行い、推進班に代わって研究部が事業全体の総合調整を担い、課題研究グループ、教養教育グループ及び連携・評価・発信グループに全ての教員を配置し、全校を挙げてSGH事業の推進を図る体制を整備した。組織改編に当たっては、事業の推進・総合調整機能の強化、各グループ・担当教員単位で進める個々の取組の検証や連携の促進、効果的な教育評価や成果普及のあり方の検討及び実施に向けて、研究部に所属する教職員の増員、連携・評価・発信グループの新設を行った(特別活動・環境整備グループについては、各教科の担当教員が担当教科に関連する特別活動を主導して推進する体制が整い、また、研究開発に必要な環境整備も概ね完了したことから廃止。)

さらに、管理機関であるお茶の水女子大学による支援体制の強化、同大学の教育資源の更なる活用及び高大連携特別教育プログラムの充実を図るため、同大学の教員から構成される「アドバイザリーボード」の正式な設置を依頼し、専門的な見地から研究開発及び事業運営に係る協力・助言を得る体制を整備した。

教育課程については、「総合的な学習の時間」2年次選択必修「グローバル総合」において、昨年度から開講している3講座(「経済発展と環境」、「国際関係と課題解決」及び「国際協力とジェンダー」)に加えて新たに1講座(「情報技術と創造力」)を開講し、各講座の内容の充実及び改善を図った。さらに、本年度より開講した学校設定科目1年次必修「グローバル地理」、「総合的な学習の時間」2年次必修「持続可能な社会の探究Ⅰ」及び3年次必修「グローバル総合アドバンス」の開発及び試行、来年度から開講予定である「総合的な学習の時間」3年次必修「持続可能な社会の探究Ⅱ」の開講準備を進めた。

海外研修及び海外の学校との連携については、昨年度実施した台湾研修及び同研修における台北市立第一女子高級中学(以下「台北一女」という。)との交流と、英語によるディスカッションを本年度も実施し、さらに本年度は台湾大学等の大学生との英語によるディスカッションを含む交流を実施した。加えて、昨年度から交流を進めてきたチューラーロンコーン大学附属中等学校との交流促進を図り、本年度はタイ研修も実施する予定で準備を進めてきたが、渡航直前にバンコクにおいて爆発事案が発生したため、生徒及び保護者の意向等も踏まえ中止することとした。同研修に参加予定であった生徒については研修先を台湾に変更し、台北一女との交流のほか、現地

の行政機関等へのフィールドワークも実施した。

なお、「総合的な学習の時間」及び海外研修の教育課程上の位置付け、内容及び実施体制等については、これまでの取組状況も踏まえ、教育効果の向上と生徒の負担解消を図るため、来年度より変更を加えることとしている。

この他、官公庁や国内外の大学等が主催する海外留学・研修プログラムへの生徒の積極的な参加を促した。過去にプログラムに参加した生徒が下学年の生徒に対して参加動機や海外での学習・体験、プログラムへの参加を通して学んだことなどについて報告する機会を設け、プログラムへの関心を高めるとともに、プログラムへの応募・参加に向けて、学年・学級の担任教諭や英語科教諭を中心に個別に相談に応じ、指導・助言を行うなど、きめ細かな対応に努めた。本年度は、SGH 指定校及びアソシエイト校の生徒を対象とした筑波大学とカナダのプリティッシュコロンビア大学(UBC)共同の「筑波・UBC グローバルリーダーズプログラム 2016」に 5 名応募し、4 名参加予定であるほか、「平成 28 年度後期(第期)官民協同海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム～」に 3 名、短期米国留学・日米の高校生間の国際交流を行う「2016 年度 AIU 高校生国際交流プログラム」に 4 名が応募しており、現在選考中である。

2 課題研究グループの取組

2.1. 必修科目

2.2.1. 1年次「グローバル地理」

(1) ねらい

現代世界の諸課題の学習を通じて、幅広い教養を備えたグローバル人材としての土台を育成する。また、学習の成果を個人やグループでまとめ、発信することで、主体性・積極性・チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感などを養う。

グローバル人材がどのような人材かについては、様々な視点があるが、ここでは幅広い教養に加え、地理的認識を通じて日本について客観的な目を持つことに加え、自分たちとは違うものの見方や考え方があるという世界の多様性を理解する人材の育成をねらいとしている。

(2) 内容

現代世界の諸課題に対し、生徒が主体的に考えていくことを重視する。そのための手段として、座学だけでなくフィールドワークを通じて実際に観察や聞き取りを行う他、学習の成果を個人やグループでレポートにまとめ、文化祭や校内発表会、外部の高校生対象コンクールなどを通じて、積極的な発信を行っていく。

学習のサイクルとしては、基礎知識の獲得・考察・発信を繰り返し螺旋階段状に行うことで、2年次以降の本格的な探究学習の基礎を形成することを意識している。

年間のおもな流れは次の図の通りである。

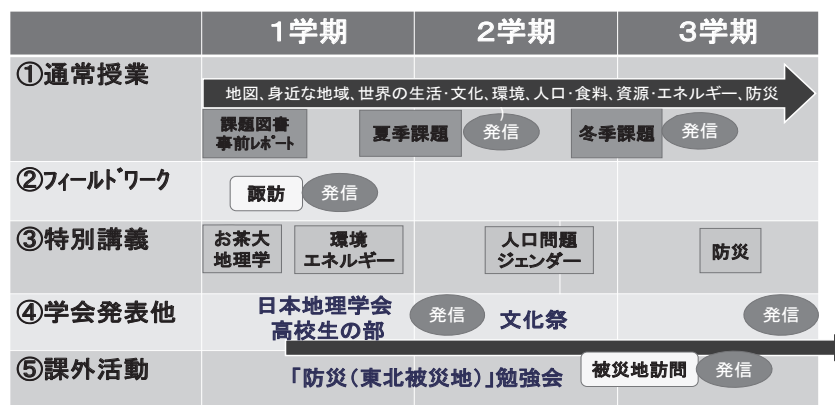


図 2.1.A-1 グローバル地理 年間の流れ

①通常授業

従来の地理 A の教科書をテキストとして用いながら、地図の活用、身近な地域と世界の結びつき、世界の生活・文化、環境、人口・食料、資源・エネルギー、ジェンダー、防災などの社会的課題に関する分野・領域を広く学習し、基礎学力の形成に努めた。

夏季休暇には、1学期の学習内容を踏まえた探究活動として、環境小論文もしくは主題図を作成する課題に取り組んだ。中央大学主催の第15回高校地球環境論文賞では本校が学校賞を受賞し、1年生1名が優秀賞受賞、8名が入賞した。また第25回環境地図作品展においても、1名が入賞した。

冬季休暇は、新聞を読むことを課し、興味関心のある社会的課題に対する自分の意見を新聞投稿という形で発信した。右の図は新聞掲載されたものの一部である。

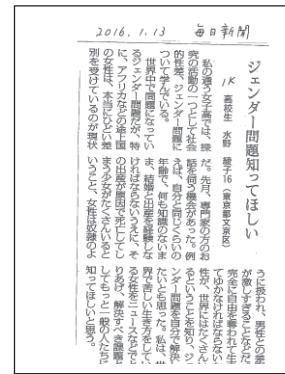


図 2.1.A-2 新聞投稿

②フィールドワーク

5月に2泊3日のフィールドワークを諏訪地方(長野県)にて実施した。従来は、1年学年合宿という位置づけで、親睦を目的に同時期に実施していたが、今年度より内容を修正し、フィールドワークとした経緯がある。訪問先や行程については、諏訪でのフィールドワーク経験が豊富なお茶の水女子大学文教育学部地理学コースの助言を受けながら、決定した。

フィールドワーク後は、その活動報告を地元新聞への投稿という形で発信を行い、お世話になった地域の方々に少しでも還元することを心がけた。

③特別講義

お茶の水女子大学文教育学部地理学コース等、大学や企業と連携した特別講義を年4回実施し、学習を深めた。第1回は、お茶の水女子大学文教育学部地理学コース長谷川直子准教授による講義「諏訪の自然と地形～地形図を活用して～」を実施し、フィールドワークのノウハウを学んだ(5月)。第2回は、パタゴニア日本支社の辻井隆行日本支社長による講義「環境問題を考える」(6月)、第3回は公益財団法人ジョイセフによる講義「発展途上国の人口問題とジェンダー」を実施した(12月)。第4回は、東京大学社会科学研究所の宇野重規教授による講義「被災地における希望の再生」を実施し、防災の授業へとつなげた。

④⑤学会発表他課外活動

以上に加え、さらに余力・意欲がある生徒に対しては、日本地理学会高校生ポスターセッションの部における発表に挑戦することを呼びかけた。秋季大会においては、4件(8名)が採択され、3月の春季大会に向けても5グループ12名が準備をしている。

また、本校のアフガン☆ボランティア部と連携した課外活動として、東日本大震災や防災について考える勉強会を定期的に行っている。12月にはお茶の水女子大学文教育学部地理学コース及び宮城教育大学と連携して、気仙沼市・南三陸町への被災地研修を実施した。研修後は附属中学校および本校内で研修報告をすることにより、生徒の声で被災地の現状や防災の大切さを広める活動を行った。

(3) 実施効果

お茶の水女子大学文教育学部地理学コースと連携し、今年度より2泊3日のフィールドワークの実施を始めたことは、従来との大きな違いの1つである。フィールドワーク後の生徒の感想によれば、「事前学習をしっかりとやり、何でも知っているつもりになっていたが、行ったからこそ分かることがあるということを実感した」「現代は、インターネットなどで簡単に情報が得られるが、直接話を聞かなければ得られない情報があるということがわかった」といった記述が多くみられ、入学直後の早い時期に実際に自分の目で見て知ること、考えることの大切さを実感できたことは今後の探究活動への意義が大きいと考える。

また、有志への学会発表への参加呼びかけも今年度からの試みであるが、延べ学年の約2割の生徒が参加し、主体性・積極性・チャレンジ精神を養うことにつながっている。

2.1.B. 2年次「持続可能な社会の探究Ⅰ」

(1) ねらい

「持続可能な社会の探究Ⅰ」(2年次)は、各生徒の興味・関心に基づき、「持続可能な社会」を実現するための課題を各自が発見して課題研究のテーマを設定し、協同して探究的な学習活動を行うことを通して、課題設定及び解決の能力を高めていくことを目的とする講座である。また、「グローバル地理」や各教科、「グローバル総合」を含めた「総合的な学習の時間」、グローバル講座等の学習活動により獲得した知識、思考力、技能を活用する機会を提供し、それらの能力をより高めていくこともねらいの1つである。

(2) 内容

2015年度は以下の①から⑥の内容の授業を展開した。

- ①各自の課題設定及び、活動班の結成
- ②探究活動の基礎的なスキル、フィールドワークのマナー等に関する学習
- ③大学、企業、国際機関、NGO等のフィールドワーク先の選定、訪問交渉、訪問調査
- ④調査結果を共有するための校内発表及び文化祭における校外への発信
- ⑤フィールドワークを含む探究活動に基づくレポート作成(2回)
- ⑥グローバルな視点から課題を見つめることをねらいとした外部講師(沖縄国際大学法学部 佐藤学教授)による特別講義

それぞれの内容の指導にあたっては、アクティブ・ラーニングにふさわしい活動となるよう留意し、生徒自身による授業前後の自学を重視した。各生徒の学習状況を把握するために、プレゼンテーションやレポート、ワークシートにより報告させ、その報告について自己評価及び相互評価を行わせた。プレゼンテーションやレポート、ワークシート評価用紙は、教員による評価の対象とするとともに返却時のコメントを通じて、生徒の学習活動を支援、促進するツールとしても活用した。

また、プレゼンテーションやレポートの評価を通して、評価の観点や基準について議論を重

表 2.1.B-1. フィールドワーク訪問先一覧

アポイントが必要・案内有	官公庁等	外務省、環境省、農林水産省、防衛省、資源エネルギー庁、自衛隊広報センター、恩賜上野動物公園、文京区役所、港区立男女平等参画センター リーブラ、横浜市動物愛護センター
	企業	青山スクエア、朝日新聞、アサヒビール株式会社、江戸からかみ東京松屋、NECソリューションイノベータ、小津和紙、オンワード、株式会社キーストーンテクノロジー、株式会社ボーダレスジャパン、かねこ琴三弦楽器店、東急グループ、東京サラヤ株式会社、東京証券取引所 東証 arrows、ノングインレイ、パナソニックセンター東京、松尾千代田法律事務所、森永乳業株式会社、Monstar Lab
	大学等	環境工学連合講演会、慶應義塾大学国際関係会、国際医療福祉大学、東京農工大学
	国際機関・公益法人・NGO等	ASEAN センター、環境エネルギー政策研究所、ケア、資源食糧問題研究所、JICA 地球ひろば、ジャパンハート、ジョイセフ、セカンドハーベストジャパン、WWF ジャパン、地球環境パートナーシッププラザ、Teach for Japan、東京ボランティア市民活動センター、農援隊、ハンガーフリーワールド、プランジャパン、ユニセフハウス
見学のみのみ	見学施設	えこっくる江東、江戸東京博物館、川崎エコ暮らし未来館、健康と医学の博物館、さいたま市立中央図書館、昭和館、食と暮らしの小さな博物館、墨田清掃工場、世田谷区立等々力図書館、都立夢の島公園博物館、日本科学未来館、日本近代文学館、平和祈念展示資料館、深川江戸資料館、港区立みなと図書館、食と暮らしの小さな博物館

ねた。議論をふまえて、「テーマ設定(課題発見力)」、「調査内容(探究のスキル)」、「考察(論理的思考力, リテラシー)」をそれぞれ 5 段階で評価するルーブリックの作成を試みたが、試案の段階に留まった。

(3) 実施効果

各自が設定した課題に沿って探究活動を行うことができるため、積極的に取り組む生徒が多かった。5 月から 7 月にかけて 3 度にわたって実施したフィールドワークの報告会では、他者のプレゼンテーションを「評価するために見る」ことを通して、各自が評価されるポイントを意識するようになり、プレゼンテーションスキルを向上させていく様子が確認できた。ポスター発表等でも、フィールドワークの訪問先やオープンキャンパス等で見た専門家や大学生の方法を取り入れる姿勢が見られ、能動的な学びにより探究のスキルを身につけていく様子が確認できた。

9 月の文化祭における発信を終えた後、それまでの活動に関する自己評価をアンケートにより調査した。それによると、訪問を受け入れてくださった各官公庁、企業、団体のご協力のおかげで、生徒が 5 月のフィールドワークとそれに向けた準備やフィールドワークの報告には積極的に取り組み、成果も上がっていたことがわかった。しかし、その後の自学により探究を深める活動が低調であったことも見えてきた。そのため、提出されたレポートに、論理的に矛盾している箇所等を指摘し、より良いレポートを作成するために必要な追加調査やレポートの構成に関するアドバイス等を添えて返却し、各自にブラッシュアップさせるとともに、沖縄に場を限定して探究のスキルを鍛えることをねらいとする授業を行った。その後、12 月に実施した調査結果を 9 月の調査結果と比較すると、「今後の探究活動にも期待している」という問いに「そうである」と答えた生徒が 9 月には全体の 27.6%であったが、12 月には 38.0%に増えた。また、この問いに「そうでない」と答えた生徒は 9 月には 2.6%であったが、12 月には 0%になった。この結果にも示されているように、生徒の効果的なアクティブ・ラーニングを実現するには、教員による支援が不可欠であることが、授業を通して確認できた。そのため、次年度に向けてより良い指導体制を構築すべく改善に取り組んでいる。

表 2.1.B-2. 探究活動に関する生徒の自己評価

	質問項目	そうである	どちらかといえば そうである	どちらかといえば そうでない	そうでない
九月調査	FW の準備・報告に積極的に取り組んだ	39.7	48.3	12.1	0.0
	FW やその準備・報告を通して、テーマへの理解が深まった	47.4	48.3	4.3	0.0
	FW やその準備・報告を通して、テーマへの関心が高まった	50.4	40.9	7.8	0.9
	FW 後の探究活動に積極的に取り組んだ	20.7	47.4	30.2	1.7
	FW 後の探究活動を通して、テーマへの理解が深まった	26.7	54.3	16.4	2.6
	FW 後の探究活動を通して、テーマへの関心が高まった	33.6	44.0	19.8	2.6
	今後の探究活動にも期待している	27.6	50.0	19.8	2.6
十二月調査	沖縄に関する学習に積極的に取り組んだ	42.6	51.9	5.6	0.0
	事前課題・授業を通して、沖縄の課題への理解が深まった	68.5	31.5	0.0	0.0
	事前課題・授業を通して、沖縄の課題への関心が高まった	69.4	27.8	2.8	0.0
	特別講義を受けて、沖縄の課題への理解が深まった	60.4	37.7	1.9	0.0
	特別講義を受けて、沖縄の課題への関心が高まった	61.3	37.7	0.9	0.0
	今後の探究活動にも期待している	38.0	50.0	12.0	0.0

2.2. 選択必修科目 2年次総合的な学習の時間「グローバル総合」

2.2.A. 国際協力とジェンダー

(1) ねらい

ジェンダーの視点を踏まえて、グローバルに諸問題を捉え発信し得る力を持つ女性リーダー育成を目指す。具体的には、教育課程の確立、世界各地で抱える貧困や紛争、そうした地域における女性の地位の低さの問題について現状を理解する。一方、女性の立場に配慮した援助や開発による、新たな問題解決方法について、世界各地の女性・男性のあり方や問題点を調べ、背景を探り、解決・解消に向けて私たちにどのような協力ができるか、海外の高校生との連携や共同研究も視野に入れ、幅広い角度から考え、手法を探る。

さらに、グローバルな問題を考えるとともに、自己のあり方、生き方、進路といったキャリアデザインも合わせて考えつつ、自ら探究した過程や成果について対外的に発信していく力を養う。

(2) 内容

今年度は、台湾研修における課題解決に向けてのディスカッションを充実させること、自分たちの活動を発信することを目標に設定した。具体的な内容を以下に示す。

ガイダンスにおいて講座の目的の確認等を行った後、ジェンダーについて、ジェンダーセンシティブの基本的な概念を理解する。また、専門的なお話を伺うために、お茶の水女子大学より、戸谷陽子先生による講義「アートに表象されるジェンダー」を受け、アートの世界を題材に表象リテラシーを学んだ。浜野隆先生による講義「開発と教育」では、国際協力の基本的な概念と国際協力の現状と課題について学んだ。三浦徹先生による講義「やさしいイスラーム」では中東諸国の現状および宗教と国際協力のあり方を学びその課題について考えた。また、京都女子大学の内海成治先生による講義「マサイの教育 現状と課題」を受け、国際協力の事例と課題について学んだ。それぞれの講義の後には、感想・意見交換を行い、さらに考えを深めた。この間に、日本及び海外のジェンダー問題についてミニレポートの作成を課し、その発表会も部分的に英語を使用して実施した。7月からは、台北一女の生徒との英語によるディスカッションや交流の準備を開始した。また、台北一女とのディスカッションのテーマについて生徒間で議論し、「児童労働」「女兒の教育支援」をテーマとした。さらに交流準備として、プレゼンテーション班、広報班、啓発グッズ開発班を作り、夏休みにかけて班活動を実施した。夏休み課題として、本講座でこれまで学習した内容を踏まえて、ジェンダーや国際協力に関わる社会的課題を自分で設定し、調査内容や考察をレポートにまとめることを課した。9月からはそのレポート発表会を実施し、互いの発表内容について意見交換を行い、課題の明確化や解決に向けての考えを深めた。10月は、台北一女との交流準備として、ディスカッションに先駆けて行う政策提言やプレゼンテーション用の電子ファイルの作成、「啓発グッズ」(後述)の作成、現地メディアへ連絡を取り、取材と ima-earth.com を通じての配信依頼を行った。台北研修には16名全員参加した。本講座は、台湾女性起業家協会副理事の Lai Pi 氏と台湾日本人会/台北市日本工商会事務局総幹事の前田吉徳氏のお話を伺った。台湾における女性の社会進出や起業のエピソード、日台関係の現状と今後の展望など、ご自身の経験を混じえつつ、現地の方ならではの話を伺うことができた。また、台湾大学にて台湾アイセックの学生との英語によるディスカッションや交流を行った。翌日に台北一女で行う課題解決のためのプレゼンテーションを見ていただき、意見を伺った。また、身近なテーマを話

題に交流を図った。英語によるディスカッションを実施する上でも良いウォーミングアップの機会となったと考える。台北一女では、まず、全体会で「女兒の教育支援」と「児童労働」のテーマについて、ジェンダーの視点から課題を示すプレゼンテーションを行った。テーマごとに2グループ計4グループに分かれて、前述の課題解決策についてディスカッションを行った。台北一女の生徒は、学校を作るなど政府や国に働きかけるような意見を多く述べていたのに対して、本校の生徒は、途上国への支援として非政府組織、民間企業、個人レベルで実行できる内容が話し合いの中心となった。話し合いの方向性を調整することに手間取るグループや意思の疎通に苦慮する場面も見られたものの、価値観の相違を踏まえたうえで交渉をし続けることや、相手の意見に理解を示しつつも自分の意見を伝え続けることの大切さを学ぶ機会となった。



図 2.2.A-1 女兒の権利を訴える缶バッジ

本校の生徒からは、途上国支援としてオリジナルロゴ入り鉛筆を作成し、販売した利益を寄付することを提案しており、そのロゴデザインについても各班で話し合い、最後にコンペを行い、ひとつのロゴを決定させた。さらに、途上国支援の啓発グッズとして本校生徒が作成した手作り缶バッジを持参し、最終日に台北一女にてチャリティー販売を行った。台北研修終了後は、交流・活動内容をレポートにまとめた。11月、本校が毎年行っている公開教育研究会において、本講座の授業公開を実施した。台北一女において実施した、課題解決のためのディスカッションの成果と研修後の振り返りから今後の課題について、発表を行い、課題解決に向けて話し合いを行った。また、海外研修発表会の準備を行い、2学期のまとめ(感想・討議)並びに年間テーマの確認を行った。1月は、冬休み課題(個々で設定している年間テーマの論文)の発表を行い、レポート発表を聞いて意見交換を行い、考えを深める。また、課題解決の一つとして、啓発グッズとして台北一女の生徒たちと考えたオリジナルロゴ入りの鉛筆を作成し、校内でチャリティー販売を行った。2月は、年間テーマ論文の要旨の英文について、SGH 語学担当の非常勤講師による添削指導の機会を設けた。また Facebook を通じて、英語と日本語で自分たちの探究活動を年間に6回発信した。

11月、本校が毎年行っている公開教育研究会において、本講座の授業公開を実施した。台北一女において実施した、課題解決のためのディスカッションの成果と研修後の振り返りから今後の課題について、発表を行い、課題解決に向けて話し合いを行った。また、海外研修発表会の準備を行い、2学期のまとめ(感想・討議)並びに年間テーマの確認を行った。1月は、冬休み課題(個々で設定している年間テーマの論文)の発表を行い、レポート発表を聞いて意見交換を行い、考えを深める。また、課題解決の一つとして、啓発グッズとして台北一女の生徒たちと考えたオリジナルロゴ入りの鉛筆を作成し、校内でチャリティー販売を行った。2月は、年間テーマ論文の要旨の英文について、SGH 語学担当の非常勤講師による添削指導の機会を設けた。また Facebook を通じて、英語と日本語で自分たちの探究活動を年間に6回発信した。



図 2.2.A-2 鉛筆と啓発用チラシ

(3) 実施効果

2年目の本年度は、4月から学校での事前・事後学習においても、現地での研修プログラムにおいても様々な工夫を行った。当初は発言や質問も数少なかった生徒達は1年を通じて大いに成長し、後半は多くの質問・意見を交換し合うようになり、意見の内容にも深まりが見られた。台湾では堂々とプレゼンテーションやディスカッションなどを行い、現地の生徒とも積極的な交流を行った。帰国後もモチベーションは非常に高く維持されており、自分たちが発案した提言内容についてどのように社会に働きかけられるかということを実際に話し合い、チャリティー商品の販売や SNS を用いた広報活動など、意欲的に具体的な活動に移す様子が印象的であった。今年度は、総じてグローバル・リーダーとしての能力を伸ばしたと思われる。

次年度に向けた課題として、ディスカッションやプレゼンテーションの準備段階におけるさらなる深い思考、探究力、適切な文献検索、データの収集・提示がなされているか、精査していきたいと考える。さらに、評価方法について具体的な検討にかかることとしたい。また、講座としては台湾研修を実施しない中で、探究内容についての同世代または海外の高校生たちとの議論の機会を作るために ICT の活用方法を模索していきたいと考える。

2.2.B. 経済発展と環境

(1) ねらい

アジアの環境問題の現状を理解し、解決方法を探るための議論・探究を行うことで、主体的に課題を発見し解決する力やコミュニケーション能力を養う。また、環境問題を解決するための具体策を検討したり、異質な意見をまとめたりする経験を通して、公共性と倫理観、リーダーシップを備えた未来のグローバル・リーダーの育成を図る。

(2) 内容

環境問題とひと口にいても幅が広いが、4月は受講者17名が自ら設定した環境問題に関する様々な課題研究テーマを持ち寄り、それを共有することで講座がスタートした。1学期は、探究活動を行なう際に必要となる基礎的能力・知識の形成時期と位置づけ、論理的思考力形成のための特別講義(アイ・シー・ネット株式会社)やJICA出前講座による特別講義を実施した。また、お茶の水女子大学の4人の留学生(中国・タイ・ハンガリー・ロシア出身)を授業に招き、それぞれの国の環境問題の現状を共有するとともに、その解決策について英語でグループディスカッションを行った。

夏季休暇前までに、課題研究テーマが類似している生徒を4グループに分け、課題を再設定し、課題解決の手段として、海外フィールドワークを実施することを生徒に意識づけた。なお、フィールドワーク先は、6人が中国天津市(2.4.A. イオン・アジアユースリーダーズを参照)、11人がタイ・バンコク(チュラーロンコーン大学附属中等学校など)を予定していた。グループごとの課題研究テーマは、以下の通りである。

- ・「ファッションと環境問題—“服”で地球を幸“福”に—」
- ・「持続可能なパーム油生産を目指して—消費者の視点から—」
- ・「循環型社会の構築—地産地消と世界農業遺産(GIAHS)—」
- ・「ゴミ問題をいかに解決するか」

4つの課題研究テーマの設定後は、アジア諸国の高校生と積極的な議論を行えるよう、放課後の時間も活用して学習を進めた。具体的には、イオン株式会社による中国天津市のゴミ問題に関する講義、独立行政法人国際協力機構で東南アジアを担当する卒業生によるタイの環境問題と日本の貢献に関する講義の他、外国人講師によるディスカッション練習を複数回実施した。また、タイのチュラーロンコーン大学附属中等学校の生徒とは、SNSを通じて前述の4つのテーマについて事前の議論及び知識共有を進めていたが、渡航2日前にバンコクで爆発事案が起きたことを受け、フィールドワークは取りやめとなった。その後、タイへ行く予定であった11名は台湾研修に合流し、先の4つのテーマで台北市立第一女子高級中学の学生と議論を行なった(2.4.B. 台湾研修報告を参照)。



図 2.2.B-1 留学生とのディスカッション



図 2.2.B-2 チュラーロンコーン大学附属との事前学習

9月以降は、4チームが先の4つのテーマで第18回全国中学高校Webコンテストへの参加を通して、Webページを作成しながら探究活動を深めていった。なお、同コンテストにおいては、4チーム中3チームが最終予選を通過しファイナリストに選ばれ、経済産業大臣賞他各賞を受賞した。また、Webづくりと並行して、環境省主催の第1回全国ユース環境活動発表大会の全国大会に出場し優秀賞を受賞、イオン株式会社主催の第4回エコワングランプリにおいても1次予選を通過し首都圏ブロック大会に出場するなど、学校外でも積極的な発信活動を行なった。

3学期は、年間の探究活動の成果をグループあるいは個人で論文にまとめた。また、講座内で論文を読み合い、相互評価を実施した。

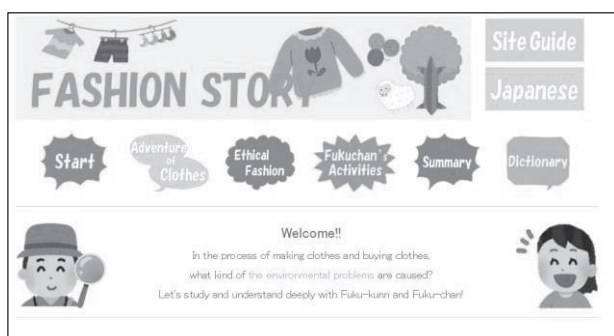


図2.2.B-3 作成したWebページ(経済産業大臣賞受賞作品) 図2.2.B-4 全国ユース環境活動発表大会

(3) 実施効果

7月と1月に実施した全校生徒対象アンケート結果をもとにした本講座の効果検証のうち、特記すべき点は以下の通りである。

「可能であれば、大学生の時に留学したい」(1(9))という項目に対して、「①大変そう思う」と回答した割合は、7月には23.5%で学年平均と同水準であったが、1月には47.1%と7月比で20%以上増加した。また、「海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい」(1(3))という項目に対しても、「①大変そう思う」「②ややそう思う」と回答した割合が7月の67.9%から1月には76.4%に増加していることから、本講座の受講により、生徒のグローバル志向が高まったといえる。

「成果や提案などを効果的に伝えたり、論文を書けるようになりたい」(4-II(1))という項目に対しても、「①大変そう思う」と回答した割合が、7月の64.7%から1月には82.4%と約20%増加し、同時期の学年平均と比較して10%以上高い。本講座では探究活動として並行し、全国中学高校Webコンテストなどを通じてその成果を積極的に発信するとともに、3学期には1年間の集大成として論文作成を行ってきたが、それらの取り組みが生徒の意欲と意識を高めたものと考えられる。

さらに、「ICTを効果的に活用することができた事例」(7(4))に関する自由記述については、7月時点では有効な回答がなかったが、1月にはWeb作成で技術担当者となった生徒全員が「Webコンテストやそれに関連する作業」を上げている。Web作成は今年度より始めた試みであり、担当教員も模索しながら進めることが多かった。ICTを活用する能力を高めるとともに、英語及び日本語で表記したWebページを作成することによりグローバルな発信ができる有意義な活動であることから、来年度も継続していきたい。

2.2.C. 国際関係と課題解決

(1) ねらい

現代の社会では、グローバル化の進展により、文化や信条の異なる人たちとの一層の協働が求められるようになってきている。同時に、国境を越えたグローバルな課題が生じ、山積している。そうした問題の解決は、国際関係を考慮したうえでの解決策立案でなければ現実性をもたない。本講座は、貧困や平和、人権といったグローバルな課題が発生する背景に何があるのか、そしてその解決のためには現実的にどうすべきかを探究する活動を通じて、グローバルな視野とグローバルな課題解決力をもった人材を育成することを目的とする。

(2) 内容

今年度の本講座における課題研究のテーマは「国際移住が進む世界において移民・難民問題にどう対応すべきか」、「現在世界が直面する、もしくは今後直面すると想定される社会的課題を解決するために、どのような企業に投資すべきか」の2つである。

具体的には、課題研究をしていく際に必要となる基礎的能力を身につけるため、4月・5月には課題解決のための論理的思考力をテーマに演習授業を実施した。6月にはグローバルリーダーシップをテーマに日本アイ・ビー・エム株式会社による特別講義、9月には国際交渉をテーマにお茶の水女子大学宮内篤氏および本校卒業生の元 UNHCR 広報職員西村洋子氏による特別講義を実施した。また、社会を動かす仕事の力をテーマにした第15回日経エデュケーションチャレンジ、国際移住と経済開発をテーマにした第9回全日本高校模擬国連大会、自ら探究課題を設定して臨む第16回日経 STOCK リーグへの参加を通して、他校生徒や企業、国際機関等への働きかけを含む探究活動を実施した。なお、第9回全日本高校模擬国連大会においては、2チームが1次予選を通過し、フランス大使およびナイジェリア大使として、国連大学での全国大会に出場することができた。さらに、年間の探究活動をふまえたレポートを作成することに加え、そのレポートの内容をより多くの人に伝えるための活動として、1月・2月には The Japan Times・ELEC・GEIC が提携して実施している The Student Times Project による英字新聞の作成を実施した。

加えて、課題研究授業の新たな評価方法の作成に向けた準備として、Association of American Colleges & Universities によるバリュールーブリックを、本校生徒の探究活動に直結する項目に絞り込み順序だて、新たなルーブリックを作成した。そのルーブリックを元に生徒同士による相互評価を実施し、ルーブリックの項目の有効性やルーブリックを用いた評価の現実性を検討した。



図 2.2.C-1
論理的思考力・ロジックツリー演習



図 2.2.C-2
日本アイ・ビー・エムによる特別講義

(3) 実施効果

本講座の効果測定として、講座内で、満足度調査と効果調査の2種類のアンケート調査を実施した。満足度調査では講座を受講しての満足度を5段階に分けたアンケート形式、効果調査は本講座を振り返ったとき、それぞれのパートがどの程度その後の探究活動に役立ったかを4段階に分けたアンケート形式で実施した。さらに、次年度以降の内容をより効果的に修正する目的として、効果調査の中に、自身の探究力がどのように変化したかを6つの観点から自己分析し5段階で評価する項目を設けた。

満足度調査では、「非常に満足した」が52.9%、「満足した」が47.1%という結果であった。また、効果調査でも概ね同様の結果となっており、講座内容に関しては十分な成果があったといえる。自身の探究力の変化(自己評価)を表したものが以下の図である。6つの観点のうち、言語活用能力を除く5つにおいて、8割以上の生徒が自身の成長を感じ取っている点は本講座の大きな成果といえる。とりわけ、現代の諸課題への関心において、受講後には全員が4(ややある)・5(かなりある)に回答をしていることは最大の成果であろう。一方で、言語活用能力においては受講前から全員が、3(普通)・2(あまりない)・1(全くない)のいずれかに回答していたが、受講後も半数以上の生徒が3(普通)と回答している。

次年度に向け、英語でのディスカッション・プレゼンテーションの機会をより多く設定するなど、改善に向けて課題を整理していきたい。

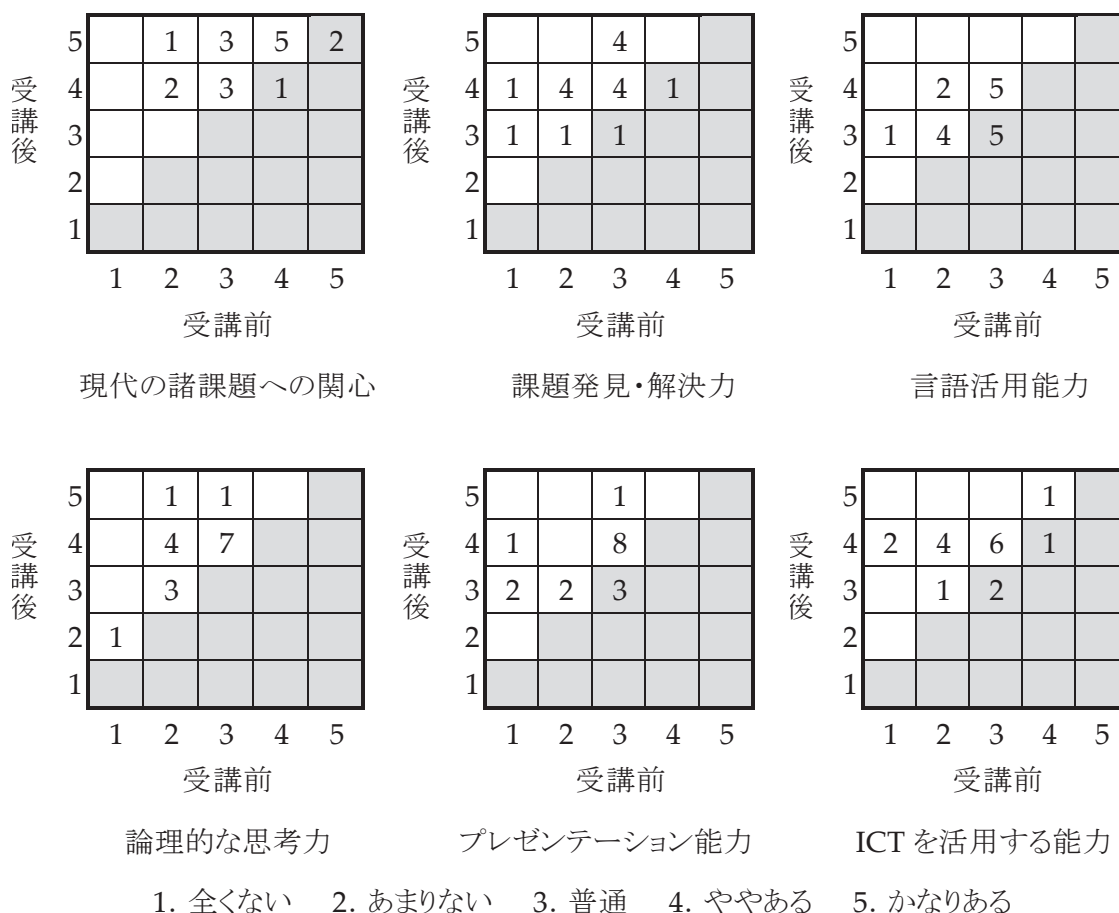


図 2.2.C-3 自身の探究力の変化

2.2.D. 情報技術と創造力

(1) ねらい

グローバル総合「情報技術と創造力」(以下、本講座)のねらいは3つある。1つめは、プログラミングを始めとした基礎的な情報関連技術に対する知識と技能の修得である。2つめは、ブレインストーミングなど思考に関する手法の練習である。3つめは、他者に対する言動・態度の自己認識と改善である。

1つめは、情報技術に関する知識と技能を養う試みである。情報化社会の変容は緩やかになってきたが、依然として変容し続けている。また、コンピュータや携帯電話、スマートフォンの普及率は向上し、インターネットや携帯電話は今や社会インフラの様相を呈している。こういった技術を知りプログラミング等の技能を身に付けることは、未来の作り手を担うにあたって欠かせない。

2つめは、ブレインストーミングなどの知的技法を知り、体験し、練習することである。いかによりアイデアを考えるかは古今東西の先人たちが直面してきた課題であり、様々な手法やフレームワークが提案されてきた。それらを知り体験し、知的技法のレパートリーを増やすことは有益である。

3つめは、他者に対する言動・態度を自己認識し改善する試みである。日常生活において自発的に自身の言動・態度を省みる機会を持つことは稀である。学校教育には「授業態度」という、良い意味で使われることは少ない言葉がある。これは当人ではない評価者から見た相対的な指標である。外部からの評価としてフィードバックを与え言動・態度に変化を促すことは可能だが、評価者にとって望ましい言動・態度を暗に強化することは、リーダーシップの醸成という目的に鑑み本意ではない。生徒自身が、自分自身の言動・態度に注意を払い、自分自身の言動・態度が想像する理想的な人物像(たとえば、グローバルな人材というおぼろげなイメージでもよい)にふさわしいか考え、もしふさわしくないならば言動・態度をどのように変えてゆけばよいかを立ち止まって考えられることは重要である。

以上の3つのねらいのもと本講座を実施し、社会的課題の解決に挑戦した。以降ではそれぞれの詳細について述べる。

(2) 内容

本講座はグローバル総合科目のうちで唯一、理工学系の内容を中心に扱う。主たる想定技術は講座名にもある通り「情報技術」であるが、最終的に情報技術を取り入れれば他分野のテーマであってもよく、また進路選択における判断材料の一つになるとも考え、校外学習や実習ではいわゆる情報系の話題に限らず、理学・工学を別け隔てなく取り上げている。

本講座の年間スケジュールは、概ね、1学期にはプログラミング等の知識・技能の修得、2学期には思考・発想手法やフレームワークの実践、3学期には課題製作に取り組んだ。

この他、外部講師による授業、校外学習を実施し、学校外で実施されるワークショップへの参加を奨励し、大会やコンテストへの参加課している。外部講師による授業では、日本マイクロソフトや Sony で活躍する方々を講師としてお招きし、最先端の技術の話題やワークショップを提供していただいた。校外学習では日本マイクロソフトを訪問し、オフィスツアーおよび全3回のワークショップを提供していただいた。理系女性教育開発共同機構による後援で実現した台湾訪問時には、Pacific Image Electronics 社の見学や台北市立第一女子高級中学での交流を実施した。学校外で実施されるワークショップでは、Curio School, Life is Tech!や

Robogals Tokyo などが開催する IT 系ワークショップや体験会を積極的に紹介した。夏季休業期間にはアプリ甲子園またはパソコン甲子園への参加(応募)、冬季休業には Microsoft Imagine Cup または情報オリンピックへの参加(応募)を見据えた活動を課している。

内外への発表は、大会やコンテスト等への参加を除けば課題製作、生徒論文集に向けた原稿、成果報告会用のプレゼンテーションがある。課題製作は、本講座の要である。3D プリンターや Raspberry Pi を始めとした様々な「考えるための部品」を提供し、想定した課題を解決するために何が使えるかの試行錯誤を期待した。生徒論文集に向けた原稿は、テクニカル・ライティングを意識した添削をし、事実や成果を正確かつ客観的に伝えるよう指導している。成果報告会用のプレゼンテーションは、先の2つに比べれば優先度は低いが、生徒論文集と同様に事実や成果を報告するのに適切な形式を意識させ、講座内で他のグループの発表を聴く際には、グローバル・スキルとしての聴く力、質問する力の存在を繰り返し告げている。

(3) 実施効果

課題製作は、3DプリンターやRaspberry Piなどの物理的な素材を提供し校外学習等でもIoTを取り上げていたが、どのグループもスマートフォンのアプリケーションに落ち着いた。これには3つの理由が考えられる。1つめは、ブロック等の教材を用いていたとはいえ、コンピュータの画面上で起こることが大半を占めていたことである。2つめは、スマートフォンはすでに多くの生徒の身近にあり、校外でのイベントでもiPhone等のアプリケーションを対象としたものが多く、印象強かったであろうことである。3つめは、学校行事や他科目の課題、定期試験等の「やること」がたくさんある中、提出期限が設定された課題の一つに、より大きなリスクをとりたくない心理が働いたであろうことである。

プログラミングの技能は、課題製作で書いたコードの量で差がついた。書籍やWebサイトの通りにコードを書いているつもりでも、実際には様々な原因でエラーが生じ、うまく動かないことが多い。エラーにどのように対処するか、エラーを抑制して実になるコードを書く時間をどの程度とれるかが差につながったようだ。もちろんエラーの解決に対して教員が力を貸すこともあるが、授業時は生徒16名に対して1名である。休み時間や休日等に対応するにしても、エラーを解決するためには生徒が作っているアプリケーションがどのような状態にあるかを把握せねばならず、概ね1件を解決するのに3~4時間程度を要したため、短期間で数をこなすことは不可能であった。このような背景から、実際にコードを書く作業に費やす時間が削がれた例があったものと推測する。なお、アプリケーションを作るにあたってまずは「動く」ことが最重要課題であるため、より適切なデータ構造やアルゴリズムがありそうな場合でも、それらの選択は二の次になった。

その他、単独実施授業での技術指導法の課題、第一希望から漏れて配属された等によるモチベーションの問題、ブレインストーミングなどにおいて時間をかけたわりには目に見えた画期的な成果に見えるものが得られないことによる気の緩み、必修科目と選択科目の課題の重みと作業の優先順位などの課題があることを確認した。

本年度の実施で確認した課題は、次年度以降、実習の形態を変える等で改善を試みる。

2.3. 選択科目

2.3.A. 3年次「グローバル総合アドバンス」

(1) ねらい

2年次の「グローバル総合」や「持続可能な社会の探究Ⅰ」、その他の探究的な活動で得た調査研究の成果を具体的な行動につなげることにより、持続可能な発展に寄与するグローバル女性人材として必要な知識・理解、思考力・判断力、技能、課題設定及び解決能力を深めることをねらいとする。

(2) 内容

本講座の中心的内容は、2年次の「グローバル総合」で作成した論文の中で自身が策定したグローバルな諸課題に対する解決策を、実際に企業や国際機関等に対して提言し、解決への具体的なアクションを起こすことである。必然的にグローバルな内容となるため、外国人講師2名による英語での授業を実施した。2年次に比べかなり難易度が上がること、また3年次の選択科目であったことから、今年度の受講者は「グローバル総合」の講座「国際関係と課題解決」から4名、同「経済発展と環境」から1名の計5名にとどまった。

具体的な活動内容としては、まず、4月から6月にかけて Action Plan を作成した。策定した課題解決策をどの企業や国際機関に提言すれば最も効果的なのかを、知見豊かな外国人講師とともに検討し、提言内容等もまとめていった。次に、7月から8月にかけて、作成した Action Plan をもとに企業や国際機関等に具体的なアクション(電話、FAX、メール、訪問)を起こした。そして、そうした活動の成果を英語を用いてプレゼンテーションする時間を文化祭において設定した。文化祭前の9月は、話の構成の作り方や資料の作成の仕方など、より効果的なプレゼンテーションに関するレクチャーを行った。最後に、10月から12月にかけて、これまでの探究の成果として英語レポートを作成した。グローバルな発信を意識し、英語論文作成にあたっての基本的なルールレクチャーを行い、外国人講師による丁寧な添削指導を実施した。



図 2.3.A-1

外国人講師による指導の様子

塗り壁のすすめ

お茶の水女子大学附属高等学校3年 駒田ひなの

研究の目的：日本の塗り壁をシンガポールにも普及させる

★塗り壁の特徴

- 健康に良い
- 環境に優しい
- 伝統文化

★クロス張りには塗り壁の優れている点

- 意匠性
- 耐火性
- 耐久性
- 調湿性
- 抗菌性

日本ではクロスが95%を占めている。

世界中に塗り壁を広めたい！

理由1 エコ先進国

シンガポールは独立後、初代首相のリー・クワンユー氏が「Garden City」(庭園都市)構想を策定し、国を挙げて緑化政策を進めてきた。その後、庭園の中に都市を作ることを目標とした「City in a Garden」構想を打ち出し、近年では自然環境と共存した暮らしやすい持続可能な都市「Liveable Sustainable City」を自国し政策を進めている。

シンガポールに注目！

理由2 塗り壁は穴場？

国士が誇るシンガポールでは、国民の80%以上がHDBと呼ばれる公共高層住宅に住んでいる。HDBでは、屋上緑化、垂直緑化、ソーラーパネル増設、適度な自然換気や自然光の取り入れ可能な室内環境設計がなされている。しかし、壁の材質などにはまだ注目されていないと考えられる。

理由3 気候にFIT!

気温が高く、湿度も比較的高い気候に適していると考えられる。

塗り壁普及のアイディア

①塗り壁パネルの普及

塗り壁パネルの良い点

- 設置しやすい
- 日本でも製作して輸出することが可能
- 塗り壁を知ってもらう上で非常に有効ではないかと考えた。

日本には既にパネル製作を行なったところのある企業がいくつかあるが、いづれも製作事例はわずかである。

「新たな産業となるのでは？」

②塗り壁の良さを知ってもらう

塗り壁パネルを用いた家の快適さなどを知ってもらうことで、塗り壁の需要を増やす。

「私たち塗り壁の家に住みたい！」

③塗り壁職人の養成

誰でも訓練を行えば塗り壁職人になることができる！

- ＜職種＞ 一技能士・作業主任者
- ＜資格＞ 三級左官技能士 二級左官技能士 (1年後) 一級左官技能士 (3年後) 一級壁左官基礎技能者 (10年後) マイスター 一工直長等
- 一部長・役員・社長

④塗り壁の普及

日本で塗り壁職人を養成することで、塗り壁の普及をすすめるようになる。塗り壁は環境に優しく、健康にも良いという素晴らしい特徴をたくさん持ち合わせているので、塗り壁がどんどん普及すればいいと思う。

この資料は皆さんの企業のご協力のもと作成しました。ご協力ありがとうございました。

図 2.3.A-2
アクションに用いるために生徒が作成したリーフレット

探究テーマ(英語論文タイトル)	主なアクション先
A revolution in Japans device approval system ～considering “HAL” as an case study～	CYBERDYNE 株式会社
Let’s solve the food issues in the world by Japanese distribution technology!	独立行政法人国際協力機構 経済産業省
Let’s spread plastered wall! ～from Japan to Singapore～	有限会社原田左官工業所 Singapore Institute of Architects
Healthcare-robot and Chinese Market	CYBERDYNE 株式会社 伊藤超短波株式会社
Kimono! Market expansion! Project!	日本和装ホールディングス株式会社

表 2.3.A-3 探究テーマと主なアクション先

(3) 実施効果

本講座の効果検証は、受講者が5名と少数であったことから、アンケート等による定量的なものよりも、受講者への聞き取りを中心とした定性的なものを重視した。聞き取りの結果、本講座を受講したことで身についたこととして挙げた主なものが以下である。

- 調べるだけではなく、いろいろな情報を選択し、その情報から自分なりに考えを深めて答えを導き出そうとする能力が身についた。
- 自分なりの考えや答えの正当性を確認するために再度調べたり、話を聞いたり、さらに質の高い研究につなげていくスキルを身につけることができた。
- 自分の興味のある分野だけでなく、違う分野にもアンテナを張るようになり、より活発な探究活動するようになった。

また、本講座受講後に感じる反省点として挙げた主なものが以下である。

- 一番の反省点は英語力の不足。英語の論文を読むのも一苦勞だったし、講師の人とすらすら英語で会話ができなかった。
- 日本語では伝わらない英語ならではのニュアンスを用いてもっと議論を深めたかったと思う。
- 海外の地域を探究活動およびアクションの対象にしていたので、もっとその現地の細かい情報を得るために英語力が必要だったと感じた。

これらのことから、本講座は、より高次の探究活動を実践したものであったといえる。一方で、高次の探究活動になればなるほど英語力が必要となってくるが、本講座では英語の教授を目的としていないため、2年次までにいかに英語力を高めておくかが重要になってくるのが分かる。

次年度は3年生全員必修の「持続可能な社会の探究Ⅱ」の中に本講座の要素を取り入れていくことになるが、いかに英語力を2年次までに習得させることができるかが最大の課題であるといえる。

2.4. 研修活動

2.4.A. イオン アジア・ユースリーダーズ

(1) ねらい

本研修は、グローバル総合「経済発展と環境」の海外フィールドワークの一環として、イオンワンパーセントクラブが主催したアジア・ユースリーダーズプログラムに参加したものである。

プログラムは、アジア諸国の高校生・大学生がディスカッションを通じて、中国・天津市のゴミ問題解決に向けた提言案をまとめ、天津市に提出する試みである。海外の生徒とともに問題解決の具体策を検討したり、異質な意見をまとめたりする経験を通して、公共性と倫理観、リーダーシップを備えた未来のグローバル・リーダーの育成を図ることがねらいである。

(2) 内容

日本からは、高校生部門に本校生徒6名を含む計12名が参加し、中国12名、インドネシア12名、マレーシア6名、タイ6名、ベトナム12名の計68名が混成チームを組み、ゴミ問題解決に向けた提案を競った。内容は以下の通りである。

- ①日程：2015年8月15日(土)～22日(土)
- ②行き先：中華人民共和国(天津市)
- ③引率教員：増田かやの(養護教諭)
- ④参加生徒：2年グローバル総合「経済発展と環境」受講者6名
- ⑤スケジュール

- 1日目 北京空港経由天津入り
- 2日目 午前：万里の長城見学
午後：オリエンテーション、政府関係者とのウェルカム・レセプション
- 3日目 チームビルディングと中国文化体験(太極拳・餃子作り・京劇)
- 4日目 午前：天津市のゴミ問題に関する講義(天津市担当者より)
午後：ゴミ処理事例見学、ショッピングセンター内で住民意識をヒアリング
- 5日目 午前：天津エコセンター見学、午後 ゴミ焼却工場見学、古文化街見学
- 6日目 グループディスカッション
- 7日目 プレゼンテーション(チームごとに発表)
表彰式、最優秀案を天津市へ提言、フェアウェルパーティー
- 8日目 北京市内視察後、北京空港発



図 2.4.A-1 アジア・ユースリーダーズ

(3) 実施効果

取組後のアンケートによれば、参加者全員が「参加してよかった」と回答しており、参加の満足度が非常に高いプログラムである。参加者は、昨年同様英語力・学力ともに本校トップレベルの生徒たちであったが、国を代表して参加している他のアジア諸国の学生に比べ、環境問題への意識・知識は勝る一方で、英語力の不十分さを実感したようである。

積極的に自分の意見を相手に伝えていくことの大切さ、異質な意見を調整することの難しさと楽しさを体感できたことは大きな成果である。日本人よりもはるかに多くの時間勉強しているアジアの高校生を見て、もっと将来に向けて勉強しなくてはと刺激を受けるとともに、日本の教育に危機感を感じたという意見もあった。

本研修は、本校が主催するものでなく、来年度以降も参加できるかどうか未定であるが、リーダー育成の優れたプログラムであり、継続参加を期待したい。

2.4.B. 台湾研修

(1) ねらい

台北市内にある協定校との連携を中心に、自分たちが設定した課題を解決することを目的としたディスカッションを通じてコミュニケーション能力や国内外への関心を高め、グローバルな姿勢や視点の育成と行動に繋げること。また、フィールドワークやホームステイを実施し、現地の人たちとの交流を通じて、他国の文化・習慣などへの理解と関心を深めることがねらいである。

(2) 内容

本研修は、2年次選択必修「グローバル総合」を履修した生徒が、海外フィールドワークとして研修を行ったものである。概要は以下の通りである。

1) 渡航先: 台湾(台北市)

2) 実施日程: 2015年10月21日(水)～24日(土)

3) 参加生徒: 2年生42名(グローバル総合の講座「経済発展と環境」11名、「国際協力とジェンダー」より16名、「情報技術と創造力」より15名)

※「経済発展と環境」の履修生徒は、当初タイでの海外研修を予定していた。しかしながら、渡航直前にバンコク市内において爆発事案が発生したため中止とし、海外研修先を台湾に切り替えた。「情報技術と創造力」は、お茶の水女子大学理系女性教育開発共同機構による海外研修として参加した。

4) 引率教員: 村田容常(校長), 沼畑早苗(地歴科教諭), 朝倉彬(理科教諭), 松野翔太(情報科教諭), 葎内ありさ(家庭科教諭), 増田かやの(養護教諭, 保健科教諭)

5) 保護者対象の説明会

文化祭の日程中に参加希望生徒の保護者を対象に説明会を実施した。内容は、事前学習の内容の説明、引率教員の紹介及び現地での担当業務の説明、また、連絡事項として、費用の払い込み方法、旅行保険、服装・持ち物、緊急時の連絡体制等の伝達である。

6) 事前学習

①事前学習レポート・発表会

グローバル総合「国際協力とジェンダー」においては、昨年度は事前学習の時間を十分に持つことができなかったという反省から、台湾の民族・歴史・地理・経済や日本の文化・歴史・地理に関してグループを作成し、調べ学習を実施した。さらに、講座の時間内でミニレポート発表会を実施した(表 2.4.2-1 参照)。史実に対する理解が不十分なところは、専門教科の教員が指導した。また、発表会では一部を英語で行うよう指示し、台湾での英語による交流に備えた。これも昨年度の英語に関する反省を生かしたものである。

発表	内容
5月25日	台湾の歴史など
6月8日	先史時代・民俗
6月22日	日本統治前
7月6日	日本統治時代
7月6日	台湾の今
7月13日	日本の紹介
9月14日	日本文化の紹介
9月28日	日本の歴史の紹介
10月5日	日本の人口や地理

②台湾に関する書籍・DVDの紹介

夏季休業前に、台湾に関する参考図書及びDVDの紹介一覧表を作成・配布し、生徒に閲覧を促した。

③英語研修

SGH 語学研修担当非常勤講師 2 名による講義を行った。日程は下記の通りである。自己紹介やホームステイ先で困らないよう日常生活レベルの内容からディスカッションにおける会話術などまで生徒のニーズに応える形で幅広く教えていただいた。

1 回目:10 月 5 日(月) 12:35～ 約 40 分

2 回目:10 月 7 日(水) 12:35～ 約 40 分

3 回目:10 月 7 日(水) 15:15～ 約 60 分

④中国語研修

お茶の水女子大学大学院生(中国人留学生)1名による講義を行った。自己紹介や買い物をするときなど日常的な会話についての講習を行った。行事の合間の多忙な時期だったため、同じ内容を 2 回実施し、どちらか 1 回は参加するよう促した。

1 回目:9 月 29 日(火) 16:00～ 約 60 分

2 回目:9 月 30 日(水) 15:30～ 約 60 分

⑤台湾の地理と歴史

研修参加生徒全員を対象に、引率の沼畑教諭(地歴科)より、台湾の地理と歴史について講義を行った。台湾に関する事前学習の内容が講座によってまちまちであったため、渡航直前ではあったが、台湾の地理や日台関係など理解すべき内容に絞って講義を実施した。

⑥健康管理

養護教諭より旅行期間中の健康管理に関する保健指導を実施した。また、事前にアレルギー調査を実施し、研修中に提供される食事やホームステイのペアを決める際の参考とした。

7)研修スケジュール

[10 月 21 日(水)]

羽田空港より出発 台北市 松山空港着

国立故宮博物院・順益原住民博物館を見学した。国立故宮博物院では、現地ガイドから主な展示物を中心に効率よく丁寧に説明いただいた。生徒も清王朝の王妃の装飾品など食い入るように見学した。また、順益原住民博物館においては、一部のグループの生徒には学芸員の方に英語で展示物の説明をしていただいた。

[10 月 22 日(木)]

終日班別活動を実施した。各班の課題解決に関連する企業や官公庁、日本人会、台湾大学などにおいてフィールドワークやディスカッションを行った。詳細を表 2.4.B-2 に示す。

[10 月 23 日(金)]

昨年、協定を結んだ、台北市立第一女子高級中学(以下、台北一女)を訪問した(表 2.4.B-3 参照。)はじめに、全体で、本校が準備した「児童労働・早すぎる結婚」と「環境に配慮した衣服」をテーマとするプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの冒頭では、家庭科と連携した取組として、人権や環境に配慮した衣服を用いたエシカル・ファッションショーを、お茶高生と台北一女の生徒がモデルとなって行い好評であった。その後、班に分かれ、それぞれ課題解決のためのテーマを設定し、台湾の生徒と英語でコミュニケー

ションを取りながら、議論を深めた。

午後は、先方の希望で「湾生回家」という日本統治下の時代に台湾で生まれ育った日本人を描いたドキュメンタリー映画を台北一女の生徒とともに映画館で鑑賞した。帰校後は、映画に登場していた台北一女出身の日本人の方と台湾人映画監督ならびにプロデューサーを招いて、質疑応答の時間を持つことができた。映画の感想を生徒間で共有したり、出演者の方からの当時の思いや生活の様子を伺ったり、映画関係者の生の声から多くのことを学ぶ機会となった。出演者からは「世界をもっと見て、活躍することを期待する」という励ましの言葉をいただき、多くの生徒は胸を打たれていた。最後に、台北一女からは手話を交えた合唱を披露。本校は、「情報技術と創造力」のチームによる学校紹介、「経済発展と環境」チームによるソーラン節のパフォーマンスを披露した。

その後、ホームステイを行い、家庭での交流を通して台湾の文化に触れた。

[10月24日(土)]

昼食前までの時間を各自ホームステイ先で過ごし、台北一女に集合した。昼食後、松山空港から羽田空港にまでの帰路についた。

表 2.4.B-2 講座別研修先一覧

講座名	研修先
国際協力とジェンダー	<ul style="list-style-type: none">台湾女性起業家協会副理事の Lai Pi 氏の講話台湾日本人会/台北市日本工商会事務局総幹事 前田吉徳氏の講話台湾大学にて台湾アイセックの学生とのディスカッション
経済発展と環境	<ul style="list-style-type: none">台北市交通局にて自転車シェアシステム YouBike についてヒアリングYouBike 試乗グリーン建築の代表である北投図書館見学, 担当者よりレクチャー北投地熱谷見学
情報技術と創造力	<ul style="list-style-type: none">内湖科学園区 Hi-Tech Promotion Center の見学Pacific Image Electronics への訪問新竹サイエンスパークの見学

(3) 実施効果

生徒の事後アンケートの結果から実施効果について報告する。

1) 事前学習について

事前学習に関する評価の結果を表 2.4.B-4 に示す。

「国際協力とジェンダー」の授業の中で実施した、「台湾ならびに日本に関するレポート作成」について、「とても役に立った」「まあまあ役立った」と回答している生徒は 87.5%であった。また、「台湾ならびに日本に関するレポートの発表会」については、「とても役に立った」「まあまあ役立った」と回答している生徒は、91.3%であった。昨年度の課題として、事前学習の時間確保の必要性があったことから、今年度は授業時間内に発表時間を盛り込む工夫をした。その結果として、「役に立った」と回答した生徒が多くを占め、改善策が功を奏したことが確認された。

「情報技術と創造力」では「台湾についての調査・発表」について 80%の生徒が「とても役に立った」、「まあまあ役立った」と回答している。また、台北一女訪問の際に学校紹介のプレゼンテーションを担当することになった。その準備について「とても役に立った」「まあまあ役立

表 2.4.B-3 台北一女 訪問スケジュール(本校と台北一女との間で調整し使用)

Schedule				
Date	Time	Activity	Note	
10/23 Fri.	08:20 ~ 08:30	Arrival at TFG	Meet partners	
	08:30 ~ 08:35	Orientation+Welcome Speech (TFG)	Zhi-Shan Conference Room	
	08:35 ~ 08:40			Speech (OGH)
	08:40 ~ 08:50	Introduction of TFG (Ambassadors)		
	08:50 ~ 09:00	Souvenirs Exchange+Group Photos		
	09:00 ~ 09:10	Break		
	09:10 ~ 09:25	Ethical Fashion Show	Workshop A: “ Girl ’ s Education” Zhi-Shan	
		Move to different classrooms		Workshop B: “Technology” English lab
		09:25 ~ 09:35		
	09:40 ~ 10:00			Workshop C: “Environment” Chinese lab
	10:10 ~ 11:00	Discussion		
	11:10 ~ 12:00	Presentation		
	12:00 ~ 13:00	Lunch		
	13:10 ~ 14:00	Watch TFG Relay Race	Playground	
	14:10 ~ 14:30	Move to the theater	西門絕色影城	
	14:30 ~ 16:30	Watch <i>Wansei Back Home</i>		
	16:30 ~ 17:00	Turn back to TFG+Break		
	17:00 ~ 17:30	Movie Discussion	Zhi-Shan Conference Room	
	17:30 ~ 17:40	Prepare for the performance	Zhi-Shan Conference Room	
	17:40 ~ 17:50	Show Time: Part I	TFG	
17:50 ~ 18:00	Show Time: Part II	OGH		
18:00 ~	Host family			
10/24 Sat.	12:00~	TFG		

った」と回答している生徒は 60%であった。

台湾の地理と歴史の講義については、100%の生徒が「とても役に立った」「まあまあ役立った」と回答している。生徒自身による調べ学習や発表も有効と考えるが、必要な内容を落と

していたり、専門的な指導が困難な状況も考えられたりすることから、専門教科の教員による全体指導は大変有効であった。

中国語の会話練習については、「とても役に立った」「まあまあ役立った」と回答している生徒が 57.1%であった。参加しなかった生徒を除くと、その割合は 63.2%であった。

表 2.4.B-4 事前学習に関する評価 (%)

		とても役に 立った	まあまあ 役立った	あまり役立 たなかった	役に立た なかった	参加して いない
ジェンダー 国際協力と	①台湾レポート作成	25.0	62.5	12.5	0.0	0.0
	②台湾レポート発表会	25.0	56.3	18.8	0.0	0.0
創造力 情報技術と	③台湾についての調査・発表	6.7	73.3	20.0	0.0	0.0
	④学校紹介プレゼンの準備	13.3	46.7	26.7	13.3	0.0
全講座共通	⑤台湾の基礎知識(沼畑)	59.3	40.7	0.0	0.0	0.0
	⑥中国語の会話練習(夢先生)	21.4	35.7	26.3	7.1	9.5
	⑦英語の会話練習(Hanako先生・ビビアン先生)	16.7	47.6	19.0	0.0	16.7

注)⑤は、「国際協力とジェンダー」及び「経済発展と環境」のデータのみ。⑥⑦は個々の技能に合わせて自由参加とした。

英語会話の事前学習は「とても役に立った」「まあまあ役立った」と回答している生徒が 64.3%であった。参加しなかった生徒を除くと、その割合は 77.1%であった。SGH の語学研修担当非常勤講師による講義内容が生徒のニーズに沿った形で行われ、現地でのコミュニケーションの一助となったことは明確である。人員体制としても大変有効であったといえよう。

2) 研修内容について

見学・訪問場所・講義内容と滞在(講義)時間に関する評価についてのアンケート結果を表 2.4.B-5 に示す。見学・訪問場所・講義内容の評価について、「とても良かった」「まあまあ良かった」と回答した生徒が、故宮博物院は 95.2%、原住民博物館は 71.4%であった。大変貴重な文化財を見学したり、原住民時代の歴史や文化に触れたりすることは、台湾を理解する上でも重要であると考えられる。台北一女訪問については、ホームステイとともに「とても良かった」「まあまあ良かった」と回答した生徒が 100%であった。具体的な内容については、後に述べるとして、学校も生徒も歓待していただき、初めは緊張していた生徒もすぐに打ち解けた様子であった。映画「灣生回家」についても 80%の生徒が「とても良かった」「まあまあ良かった」と回答した。当初はどのような内容なのか想像できず戸惑ったが、日台の高校生が一緒に見ることによって理解を深めることができた。さらに、学校に戻ってからの映画関係者との質疑応答も大変貴重な経験となった。

滞在(講義)時間に関する評価については、おおむね「ちょうどよかった」と回答している。その中でも故宮博物院の見学については、物足りなさを感じた生徒が少なからずいた。広い施設内の豊富な展示物をすべて見学しようとするとうとう時間も足りなくなる。初めて触れ

るものすべてに興味・関心を持ち、理解しようとする姿勢を尊重したいものの、3泊4日の短期間でいかに効率的かつ十分なフィールドワークを実施させるのか難しいところである。

表 2.4.B-5 見学・訪問場所・講義内容と滞在(講義)時間に関する評価 (%)

		見学・訪問場所・講義内容としての評価				滞在(講義)時間に関する評価				
		良かった	とても良かった	まあまあ良かった	まあまあ良かった	良かった	良かった	良かった	良かった	良かった
10/21	故宮博物院	61.9	33.3	4.8	0.0	26.2	57.1	11.9	4.8	
	原住民博物館	21.4	50.0	26.2	2.4	21.4	73.8	4.8	0.0	
10/23	台北第一女子高級中学訪問	83.3	16.7	0.0	0.0	2.4	71.4	19.0	7.1	
	台湾の映画	35.7	45.2	19.0	0.0	33.3	61.9	4.8	0.0	
	ホームステイ	95.2	4.8	0.0	0.0	0.0	45.2	38.0	16.7	
10/22 に実施した講座別ワーク										
国際協力とジェンダー	女性起業家 講話	43.8	37.5	18.8	0.0	31.3	68.8	0.0	0.0	
	台湾日本人会 講話	43.8	37.5	18.8	0.0	25.0	75.0	0.0	0.0	
	台湾大学見学	50.0	37.5	6.3	6.3	12.5	50.0	37.5	0.0	
	台湾の学生とのディスカッション	56.3	31.3	12.5	0.0	12.5	31.3	50.0	12.5	
経済発展と環境	台湾市交通局 講話	63.6	27.3	9.1	0.0	18.2	81.8	0.0	0.0	
	YouBike 試乗	63.6	27.3	9.1	0.0	9.1	9.1	63.6	18.2	
	地熱谷見学	45.5	45.5	9.1	0.0	9.1	81.8	9.1	0.0	
	グリーン建築図書館	81.8	18.2	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	
情報技術と創造力	Hi-Tech Promotion Center	20.0	46.7	26.7	6.7	6.7	86.7	6.7	0.0	
	Pacific Image Electronics	20.0	46.7	33.3	0.0	6.7	93.3	0.0	0.0	
	新竹サイエンスパーク	33.3	46.7	20.0	0.0	13.3	80.0	6.7	0.0	

10/22 に実施した講座別ワーク滞在(講義)時間に関する評価についてもおおむね好評であった。課題解決に向けてフィールドワークを計画する中で、訪問先を探す段階では朝に夕べを謀らずであったものの、現地での経験は貴重なものとなり、成果を上げることができたと考ええる。

3) 帰国後、年度末に実施したアンケートの結果

「台湾研修に参加して、どのような意識の変化があったか(複数回答可)」さらに、「帰国後に意識の変化を何らかの行動に移せたか」の回答は、それぞれ表 2.4.B-6、表 2.4.B-7 のとおりであった。

表 2.4.B-6 台湾研修に参加して、どのような意識の変化があったか (人/%)

	はい	いいえ	はい	いいえ
海外の文化や歴史への興味・関心が広がった	41	1	97.6	2.4
日本の文化についても興味・関心が広がった	30	12	71.4	28.6
科学技術, IT などへの興味・関心が広がった	12	30	28.6	71.4
国際政治や外交などへの興味・関心が広がった	27	15	64.3	35.7
国際的な経済活動への興味・関心が広がった	25	17	59.5	40.5
留学したいと思うようになった	23	19	54.8	45.2
海外で働きたいと思うようになった	10	32	23.8	76.2
語学力を高めたいと思うようになった	41	1	97.6	2.4
誰とでもコミュニケーションできる積極性を持ちたいと思うようになった	40	2	95.2	4.8
その他	0	0	0.0	0.0
特に変化はなかった	2	40	4.8	95.2

表 2.4.B-7 帰国後に意識の変化を何らかの行動に移せたか (上段:人/下段:%)

	はい	いいえ	記述内容
海外のニュースや記事を積極的に視聴するようになった	23 54.8	19 45.2	
関心を持ったテーマについて自主的に積極的に学ぶようになった	4 9.5	38 90.5	台湾の選挙, 日中韓+米の国家関係, パリのテロ事件, 国際問題, 女性企業家について
講演会やセミナーなどに積極的に参加するようになった	4 9.5	38 90.5	
授業に積極的に取り組むようになった	20 47.6	22 52.4	世界史, 日本史, 情報, 現代史, 家庭科, 国際問題, 女性の社会進出
語学力を高める努力をするようになった	30 71.4	12 28.6	日本語, 中国語
英語の検定試験を受けるようになった	5 11.9	37 88.1	英検, TOEFL
英語以外の検定, 資格試験を受けるようになった	0 0	42 100.0	
研修で知り合った友人と連絡を取り続けている	30 71.4	12 28.6	
その他	1 2.4	41 97.6	中国語が聞き取れるようになってきた

台湾研修に参加して、どのような意識の変化があったかについては、「海外の文化や歴史への興味・関心が広がった」は 97.6%、「日本の文化についても興味・関心が広がった」は 71.4%、「語学力を高めたいと思うようになった」は 97.6%、「誰とでもコミュニケーションできる

積極性を持ちたいと思うようになった」は 95.2%の生徒が「はい」と回答していた。このような高い数値を得たことは、注視すべきことである。いずれもグローバル人材育成に必要な不可欠な項目であり、本研修のねらいに沿った結果を得ることができた。

一方、「科学技術、IT などへの興味・関心が広がった」は全体としては 28.6%にとどまったものの、「情報技術と創造力」の講座に限ってみると、66.7%となっている。興味・関心を引き出す研修のあり方が問われた結果ともいえよう。また、「海外で働きたいと思うようになった」については、23.8%にとどまった。研修の内容をキャリア形成に活かすことについては検討の余地を残す形となった。

帰国後に意識の変化を何らかの行動に移せたかについては、「語学力を高める努力をするようになった」と回答した生徒が 71.4%、「研修で知り合った友人と連絡を取り続けている」と回答した生徒が 71.4%であった。

また、「関心を持ったテーマについて自主的に積極的に学ぶようになった」や「講演会やセミナーなどに積極的に参加するようになった」について「いいえ」と回答した生徒が 9 割を占めていた。生徒たちは日常的な学習や行事など日々の学校生活に多忙を極めており、関心はあるものの行動に移す時間や余裕はないのだろうと感じる。一方、研修の成果を高校あるいは進学校の主体的な学びにどのようにつなげていくかは今後の課題である。

「意識や行動の変化は結果として現れたか」の具体的な記述(抜粋)は次に示すとおりである。

- ・LINE での英語のやりとりが増え、日常会話で使う英語を覚えるようになった。 ・TOEFL 取得。
- ・英語を積極的に話すようになった結果、成績が上がった。 ・英語をうまくなりたいと思うようになった。
- ・ホームステイ先方が日本語完璧で私には日本語、たまに中国語で話しかけてくれて中国語のニュアンスや単語を知ることができた。
- ・日本国内だけでなく、より国外、特にアジアの勢力関係を意識するようになった。
- ・日本国内で起こった事故をさまざまな視点から考えるようになった。
- ・中国語が話せるようになりたい。 ・台湾での話し合いを基にした web ページが完成した。
- ・海外のニュースを見るときに「現地目線」になって物事を考えてみるようになった。
- ・自分の英語に自信はなかったけれど、現地の人とコミュニケーションをとれたことで自信がついた。
- ・初対面の人と反すのは苦手だと思っていたけど、少しだけ苦手意識が克服できた。
- ・コミュニケーションがあまりうまくできなかったので「生きる英語」を手に入れられるよう精進している。
- ・Facebook に日本語と英語の投稿をするようになった。 ・外国を取材する番組がすごく気になるようになった。
- ・いろいろな人とコミュニケーションをとろうと思った(グローバルに)。
- ・英語をもっと学ぼうと思った。台湾の文化や食べ物を多くの人に広めようと考えた。
- ・海外の人とコミュニケーションをする際に必要だった相手をしっかり受け止めることで意識するようになった。
- ・英語力をもっと高めたいという思いが結果として表れた。
- ・街を歩いていて、目にしたものを頭の中で英語にして、そこから関連される話題を頭に浮かべてどんどん英文をつくる練習をしています。
- ・常に最悪の状態を想定して具体的に計画してものごと臨む。
- ・さらなる語学力の向上として英検準一級の勉強をしているが、一か月では結果はあられず持続的な勉強が必要だから。
- ・コミュニケーション英語の時間、ペアワークの時は日本語を使わないように心がけるようになった。

「意欲や興味・関心の高まりは現在も継続しているか」の具体的な記述(抜粋)は次に示すとおりである。

- ・特別行事期間中講義を受けたり、ペアだった台北一女の子の活動を SNS で見たりして、自分にはもっとやるべきことがあると思えるから。 ・英語と中国語は、大人になるまでにマスターしたいと思った。
- ・web コンでも台湾研修について扱ったから。 ・英語でコミュニケーションをとることの楽しさを知ったから。
- ・少しずつではあるがホームステイ先の子と連絡を取っているから。
- ・一度はじめてら次の気になることが出てきたため。 ・海外でのニュースが身近に感じるようになった。
- ・自分から海外のニュースについても調べるようになり、知識が深くなってきていると思う。
- ・台湾の天気をたまにチェックして、まだあたたかいことに気づいた。
- ・YouBike をうけて、日本を調査したところ、千代田バイクというものがあるのに気づけた。
- ・世界中の人ともっと交流したいから！日々継続中！
- ・頻繁にニュースや情報をチェックし、日本と諸外国の関係により注目するようになった。
- ・台湾についてのニュースをよくみる。 ・以前より留学に興味を持った。
- ・語学力を高めたいと思っている。 ・外国語会話、海外生活について。
- ・英語を頑張るようになった、意思疎通がもっとしたかった。
- ・ Facebook を通してホストファミリーと繋がっているのでより英語や中国語を学びたい気持ちがある。
- ・強く思ったし、もともと思っていたことだったから。
- ・大学のことを考えるときにも留学などを視野に入れるようになった。この経験を活かしたいと思えるようになった。
- ・英語の大切さを実感したから。 ・経験を活かしたいと思っているから。
- ・国際的なニュースに興味をもつようになった。
- ・優秀な台湾の子との交流から、もっとがんばらなければと思うようになったから。
- ・今は、学生であり、学生から訴えることでジェンダー社会を変えることは難しいと分かり、私達が大人になってリーダーになって、ぜひ変えていきたいと思っているから。
- ・台湾研修へ行ったことはとても貴重なことであり皆に知らせたいから。
- ・やはり海外に対する全体的な興味は今もなお高まり、継続しています。
- ・基本的に海外への興味関心は私の場合常にあります！でも研修を通してより高まったと思います。
- ・台湾の学生との交流だけでなく、台湾研修までの準備や事後学習の中でも、学んだことがとても多く刺激になったから。
- ・色々な国の人たちとコミュニケーションを取ったりそのために色々な背景を知ろうと思っているから。

「台湾研修はあなたにとってどんな意味を持ったか」の具体的な記述(抜粋)は次に示すとおりである。

- ・英語をもっと話せるようになりたいと思うきっかけになった。 ・積極性の大切さを知ることができた。
- ・日本とは違う文化に触れ、今まで漠然としていた世界というものを知り、それに少し近づいた気がする。
- ・初めての海外だったので外国の文化を知るいい機会だった。
- ・情報について学べたかどうかは疑問だが、異文化交流という意味で視野が広がった。
- ・英語で会話する楽しさを知った。 ・異国を知り興味を持つ機会、外国人の友達を作れた。
- ・自分の世界を広げられた。 ・初めて親がいない旅行だったから自分で考えることを学べた。
- ・異国人と会話するのに英語が重要だということを改めて感じた。
- ・情報科としては日本と台湾で経済発展に差がある中、どのように都市を発展させているか、また IT をどのように利用

しているか身近に知ることができた。

- ・日本国民としては湾生という日台を結ぶ大切な人々を知りその内の一人と言葉をかわすことができた。
- ・語学に関心を持った面、学習面様々な理由でとても刺激になった研修でした。
- ・英語をもっと深めたいと思ったし、日本だけでなく台湾を含めた世界全体で考える視点をもてた。
- ・グローバル化による国際人の必要性の実態。 ・今回の人生の上で指針の変化。
- ・英語にもコミュニケーション能力にも自信がなかった私は、ホームステイが不安で仕方なかったけれど、ホストファミリーと楽しい時間を過ごすことができて、多少自信がついた。将来海外からの留学生を私の家庭で受け入れたいと思った。
- ・自分の知識を深めるためにも積極的に国外の人の意見を聞いていきたいと思った。
- ・日本の文化から離れたことによって、日本の文化の良さ(たとえばトイレや食事)を再認識することができ、日本と台湾を比べて日本人も取り入れるべきもの(たとえば Youbike)を発見する機会になった。
- ・自分の現在の姿を見つめなおすきっかけ。 ・刺激を受けて自分を高めたいと思うようになった。
- ・グローバルな視点を持ち、積極的に海外の人々ともコミュニケーションをとることの重要性を理解した。
- ・異文化があること、日本が普通ではないことを改めて実感した。
- ・初めて外国に行き、日本と違う気候や習慣を感じられて良い機会になった。
- ・英語でのディスカッションやホームステイを経験したことで、英語での会話の抵抗が小さくなった。
- ・同年代の海外の人と交流でき、とても貴重な経験をして自信になった。
- ・一つの価値観にとらわれない大切さを知り、色々な人・ものから刺激をうけられる場。
- ・今までは欧米に目を向けがちだったが、アジアに対する関心が高まった。
- ・現地に行かないとわからない台湾の人々の考えに触れられて、親日国民の理由がわかったし、自分自身に日本人としての自覚も生まれた。また1人の日本人として自分自身や自分の国のルーツ・歴史を詳しく学びたいと考えるようになった。

「個人や家族での旅行とは異なる、学校が主催する海外研修旅行の意義はどこにあると思うか」の具体的な記述(抜粋)は次に示すとおりである。

- ・ただ楽しむだけではなく、その国の文化などを学び、自分の視野を広げること。
- ・旅行とは違って様々な教養を得た。 ・学校が身元を保証してくれるため、知り合う時に不安がやわらぐ。
- ・自分の力だけで何も誰も知らないところで生活することで自立心、責任感が芽生える。
- ・学びが多いこと。 ・個人でしっかり責任を持たなくてはいけない、友達同士で協力し合える点。
- ・自分の力で全て行動するところ。 ・学校同士で関われるため、相手の学校について知れるし交流できること。
- ・自分で考えて行動する、コミュニケーションを積極的に取ることができる、学校で残っている人たちの分も頑張ろうと思える。 ・不安や疲れで帰りたくても甘えられない、逃げられない。
- ・コミュニケーションの向上、世界の抱える問題の解決に向けて他国の生徒と意見交換すること。
- ・個人ではなかなか入れないところや会えない人に会えるので旅行では注目されない学校的なことが学べる。
- ・ホームステイやディスカッションは絶対に旅行では出来ないことで、そういったことで海外への考え方なども変わって、よりグローバルな見方ができるようになる。
- ・英語にもコミュニケーション能力にも自信がなかった私は、ホームステイが不安で仕方なかったけれど、ホストファミリーと楽しい時間を過ごすことができて、多少自信がついた。将来海外からの留学生を私の家庭で受け入れたいと思った。

3. 教養教育グループの取組

本校では、従来より、各教科の授業の中で探究的な学習を取り入れた取組を行ってきているが、さらに SGH の取組を進めていく中で教養を高めたり、探究的な学習の土台となるような取組を行った。

特に、生徒が探究活動をしていく中で、統計データやグラフなどの数値を用いて考察しより論理的で説得力のある結論が導き出せるよう、「教養基礎『数学Ⅰ』」の授業の中で、特別講義およびそれを受けての取組を行った。また、次年度より2年次の課題研究が一本化することを踏まえ、探究の基礎となる知識・技能に関する特別講義「図書館を活用した探究の仕方」(お茶の水女子大学 図書・情報課課長による)を1年生全員対象で行う(3月下旬実施予定)。

以下の項目について次ページより報告する。

- 国際交流イベント ジョイントフォーラム 2015
- 自国文化理解教育 文楽・歌舞伎
- 英語によるサマープログラム
- e-learning システムの活用
- 教養基礎「数学Ⅰ」特別授業「統計を用いた課題解決」

3.1. グローバル講座

3.1.A. ミス・インターナショナル

書式1 (希望者用)

SGH事業(教養教育)報告書

担当者: 菊池 美千世

事業名	国際交流イベント ジョイントフォーラム 2015
実施日時	2015年 10月 24日(土) 10:30 ~ 16:00
場所	お茶の水女子大学 共通講義棟2号館201室
対象者 (参加者数)	お茶の水女子大学学部生、大学院生及び附属高等学校生 (高校生は16人参加)
主催者	お茶の水女子大学 企画戦略課
実施概要	<p>ミス・インターナショナル2015(75カ国代表)と本学学生及び生徒による「女性とキャリア」をテーマとしたグループディスカッション及び異文化交流を実施。</p> <p><プログラム詳細> 10:30~10:40 学長挨拶 10:40~11:20 坂東久美子消費者庁長官による英語での基調講演 演題「未来を生きる女性の果たす役割」 11:30~14:00 グループディスカッション(ランチミーティング形式)(※) 14:10~15:30 グループ発表(1グループ5分以内) 15:30~15:45 全体総括</p> <p>(※)ミス・インターナショナル5名及び学生・生5名程度で1グループを編成。学生・生徒は予めグループディスカッションで話す内容を準備しておき、ミス・インターナショナルからはディスカッションの中で、各国の事情や自らの進路の展望等についても紹介いただいた。</p>

アンケート集計結果

(回答数: 16)

1. 参加した理由(複数回答可)	英語によるディスカッションへの関心		ミス・インターナショナルとの交流への関心		国際交流への関心		国際的な職業を目指す上で有益		自分の視野を広げるため・家族の薦め	
	11人	68.8%	9人	56.3%	7人	43.8%	1人	6.3%	1人	6.3%
	ほぼ完全に理解・参加できた		かなり理解・参加できた		まあまあ理解・参加できた		あまり理解・参加できなかった			
2. 消費者庁長官の英語による講演の理解度	2人	12.5%	3人	18.8%	8人	50.0%	3人	18.8%		
3. 英語によるディスカッションの理解度	3人	18.8%	3人	18.8%	7人	43.8%	3人	18.8%		
4. 英語によるディスカッションへの参加度	3人	18.8%	3人	18.8%	5人	31.3%	5人	31.3%		
	非常に影響・満足		かなり影響・満足		どちらともいえない		あまり影響・満足せず			
5. 今後の進路への影響	2人	12.5%	8人	50.0%	6人	37.5%	0人	0.0%		
6. フォーラムに参加した満足度	11人	68.8%	5人	31.3%	0人	0.0%	0人	0.0%		
7. フォーラムに満足した理由 (複数回答可)	積極的に英語でディスカッションで楽しかった		様々な国の事情・人々の考え方に触れ、視野が広がった		英語力の課題が浮き出し、今後の学習の動機付けができた		女性として将来働く上で参考になった			
	6人	37.5%	6人	37.5%	4人	25.0%	1人	6.3%		

アンケート結果を踏まえた分析

■英語による講演・グループディスカッションを通して

英語によるディスカッションへの意欲の高い生徒が参加したこともあり、消費者庁長官の英語による講演、ミス・インターナショナルや大学生とのグループディスカッションの理解度や参加度については、参加した生徒の約8割が概ね理解・参加できた旨回答している。ほぼ完全に理解・参加できたとする生徒が約3~4割程度であった一方、ミス・インターナショナルのディスカッションへの積極的な姿勢や大学生の英語力の高さ等にも影響を受け、25%の生徒が、自らの英語力の課題を把握でき、今後の英語学習の動機付けができたと回答している。英語によるコミュニケーションに関する課題として、語彙力の不足を挙げる生徒がいる一方、ディスカッションの話題づくりに当たってミス・インターナショナルの出身国の地理的特色等に係る知識不足を痛感し、幅広い知識や教養を身に付けることの重要性を感じた生徒もいた。また、必ずしも完璧な英文でなくとも、ジェスチャーや単語のみで議論を進めることができることを学べたとする生徒がいるなど、“活きたディスカッション”を通じた発見もあったようである。

■ミス・インターナショナルとの交流を通して

ミス・インターナショナルとの交流、国際交流に関心を持ち参加した生徒が大半であったが、様々な国の事情・人々の考え方に触れ、視野が広がったとする生徒が全参加者の約4割にのぼった。ディスカッションでは国際色豊かな会話が展開され、自らの固定観念をしばしば覆されたとする生徒がいる一方、文化や生活習慣の異なる国どうしでも意見や考え方が類似している点が多く、世界のつながりを感じたという意見、各国が抱える課題の共通点・相違点を感じたという意見もあった。また、約4割の生徒から、ミス・インターナショナルの本フォーラムに対する積極的な取組姿勢、自国の特性や課題等についての理解の深さや自国の代表としての責任感の強さに刺激を受けたとする回答が得られた。

■自らの進路への影響(女性の地位や社会における活躍についても含む)

本フォーラムの参加が今後の自らの進路に影響を与えたとする生徒は、参加者全体の約7割にのぼった。中には、これまで意識しなかった海外留学への興味が沸いたとする生徒、将来国際的な職業を目指す上で今後も各国が抱える課題解決のために何ができるか考えていく契機となり、国境を越えた交流・協力の重要性を感じたとする生徒もいた。また、ディスカッションのテーマが「女性とキャリア」であったことから、国別・分野別で女性の地位や社会進出度が異なることやその背景を知り、女性の地位向上のために何ができるか政策的な観点から考える契機となったとする生徒もいる一方、今後の自らの進路に引き付け、女性独自の強みや自分らしさを生かし、男性と家事や育児を分担・協力しながら仕事をしていきたいとする生徒もいた。

3.2. 日本文化を知るための伝統文化鑑賞

3.2.A. 文楽

書式2（全員用）

SGH事業（教養教育）報告書

担当者：植田 敦子

事業名	自国文化理解教育(文楽)
実施日時	2015年12月11日(金) 11:00～13:25
場所	国立劇場（東京都千代田区）
対象者 (参加者数)	第2学年 (117人)
連携先	国立劇場（独立行政法人 日本芸術文化振興会）
実施概要	<p>自国文化理解の取組の一環として、自国の伝統文化についての理解を深めるため、ある程度古文や歴史の学習が進んだ2年生を対象に文楽鑑賞会を企画した。今年度は、学校にて本校元教諭による、文楽の基礎知識を学ぶ事前レクチャーを一時間行った上で、国立劇場における文楽鑑賞教室に参加した。</p> <p>文楽鑑賞教室ではまず『二人禿』を鑑賞し、その後、文楽の魅力や文楽を担う人形遣い、太夫、三味線弾きの役割について解説いただいた。最後に『三十三間堂棟由来』(鷹狩の段・平太郎住家より木遣り音頭の段)を鑑賞した。</p> <p>費用 1,300円(一人あたり) 引率 二年担任 ほか</p>

アンケート集計結果

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうでない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1. 内容が理解できた	52人	46%	52人	46%	7人	6%	1人	1%
2. 興味・関心が向上した	43人	38%	55人	49%	12人	11%	2人	2%
3. 進路の参考になった	3人	3%	4人	4%	45人	40%	60人	54%
4. 次の機会にも期待している	35人	31%	62人	55%	11人	10%	4人	4%

アンケート結果を踏まえた分析

昨年度と違い、今年度は鑑賞教室だったからか、「内容が理解できた」に対して、「そうである」と答えた生徒が46%と、非常に高かった。(昨年度は、20%)また、他の項目「興味関心が向上した」も「そうである」が38%(昨年度は32%)「次の機会にも期待している」の「そうである」も31%(昨年度は21%)と、満足度の高い鑑賞会であったようである。その意味では、今年度の鑑賞教室は成功したと言える。アンケートの記述を見ても、事前に配られたパンフレットに載せてある台詞も追いつながら鑑賞したり、人形の使い方や、三味線や語りに着目した記述も多く、事前レクチャーや当日のレクチャー「文楽の魅力」が鑑賞力を高めるのに役立っているものと思われる。自国文化理解というねらいは、十分達成されたと捉えている。

3.2.B. 歌舞伎

書式2 (全員用)

SGH事業(教養教育)報告書

担当者: 畠山 俊

事業名	自国文化理解教育(歌舞伎)
実施日時	2015年12月11日(金) 10:30 ~ 16:00
場所	歌舞伎座 (東京都中央区銀座)
対象者 (参加者数)	第一学年 (119人)
連携先	歌舞伎座 (株式会社 歌舞伎座)
実施概要	<p>スーパーグローバルハイスクール事業の一環として、自国文化理解教育が組み込まれている。1年生には、古典芸能に触れる機会を与えるために、歌舞伎鑑賞を設けている。</p> <p>事前学習はLHRの時間を使って、歌舞伎の歴史・見所などに関する講義を行った。また、演目のあらすじを資料として配布した。このように基礎知識を身につけた上で鑑賞に臨んだ。</p> <p>また、事後指導は同じくLHRの時間に、扇崎秀蘭氏による実技を交えたレクチャーを受けた。</p> <p>演目 1 本朝廿四孝 十種香 2 赤い陣羽織 3 重戀雪関扉</p> <p>費用 3,600円(一人あたり) 引率 一年担任 ほか</p>

アンケート集計結果 (回答数:119)

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうでない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2. 興味・関心が向上した	49人	41%	59人	50%	10人	8%	1人	1%
3. 進路の参考になった	4人	3%	7人	6%	41人	34%	67人	56%
4. 次の機会にも期待している	53人	45%	54人	45%	10人	8%	2人	2%

アンケート結果を踏まえた分析

<p>演目による難易の差があり、今年度の演目はややわかりにくいものも含まれていた。それでも内容について4そうである、と3どちらかといえばそうであるを合わせると6割以上となる。事前学習等の成果もあるのではないかと考えられる。</p> <p>また、「次の機会にも期待している」という項目では、4、3を合わせると実に9割の生徒となる。ふだんはあまり接することのない自国の伝統文化であるが、きっかけさえあれば、触れてみたいと考えている生徒が多い。</p> <p>新装なった歌舞伎座での公演であり、鑑賞の前後で建物の写真を撮っている生徒も多く、自国の文化全般への興味関心を高めることに役立った。</p>
--

3.3. お茶の水女子大学

3.3.A. サマープログラム参加

書式1 (希望者用)

SGH事業(教養教育)報告書

担当者: 津久井 貴之

事業名	お茶の水女子大学 英語によるサマープログラム
実施日時	2015年 8月3日(月)~8月7日(金)
場所	お茶の水女子大学
対象者 (参加者数)	参加者80名
連絡先 (担当者など)	お茶の水女子大学外国語教育センター
実施概要	<p>(1) ねらいと概要 お茶の水女子大学「グローバル人材育成推進事業」の1つとして、お茶の水女子大学の大学生及び留学生向けに企画されたプログラムに、「異文化体験や実践的な英語使用場面の機会の確保及びコミュニケーション能力の強化と異文化への理解の増進」をねらいとしたSGH及び高大連携の取組の1つとして、高校生が参加した。主に、①大学教授による英語の講義、②外国人留学生との交流を行った。①では、環境心理学、食物栄養学、宇宙物理学、日中の近現代史など幅広い学問領域が扱われ、②では、日本の食文化や日本語、アニメに関する交流やプレゼン、ディスカッションが行われるなど、多様な活動が行われた。</p> <p>(2) 取組の工夫 本プログラムの主管である大学の「外国語教育推進センター」センター長及び担当教授と連絡を取り、高校生が参加する目的を説明するとともに、高校生のニーズを伝え、プログラムの内容に反映してもらった。具体的には、以下の工夫をした。 ①大学生向けのパンフレットを全生徒に配布、別途高校生用の実施要項も配布した。 ②「日本語教室」は、当初外国人留学生のみを対象とした講座であったが、参加希望生徒に個別に事情を聞くと、「日本語を教えることや日本語を学びたいと考えている留学生に興味がある」ことが分かり、大学担当者と協議し、日本語指導の助手として参加させた。 ③一部自然科学系の講義では、講義を聴く前に担当教授から関連するトピックについて自分なりに考えをもっておくよう課題を設定してもらい、英語で行われる講義内容をスムーズに理解できるようにした。また、講義参加後に読んでおくことよい資料について提示してもらい、Summer Program参加後の事後学習を行えるようにした。 ④探究活動の成果の一部を発表する機会として、2年生の生徒たちが食文化を中心に外国人留学生に対して英語でプレゼンを行った。</p>

成果と課題

<p>(1) 成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者数は、前年度8名に対して、80名と10倍になった。 ・中高大の生徒・学生が連携して異文化交流を行ったり、大学・附属高校・中学校の教員が連携して企画の改善やアイデアの共有を行ったりしたことは、中高大の連携を強化するとともに、普段の探究活動や英語教育を行う上での連携を深めていくうえで貴重な機会となった。 ・「日本語講座」に参加した生徒は、日頃英語を学習する生徒が、日本語を学習する留学生に母語の日本語を教えるという貴重な体験をすることができた。 ・プレゼンを行った生徒たちは、日頃の探究成果を英語で外国人に発信する機会を得るとともに、発表内容に関する質問を受けるなどして、英語を用いたより実践的な交流を行うことができた。 <p>(2) 課題</p> <p>今後は、講義内容に関して、更に高校生が参加しやすい内容や形態を工夫してもらうとともに、講義内容についての資料や映像などを生徒が事前に学習したり事後に振り返ったりすることができる工夫を広げていけるとよい。</p>

参考(サマープログラムに参加した生徒が夏季の自主的な学習として書いてきた感想 ※原文そのまま)

<p>Today, I joined the Ochadai Summer Program. I took "Introduction to Japanese Culture I". At first, I was afraid of talking with the foreign people without using Japanese. There were nine foreign students in my group. They are from Thailand, the U.S. and so on. I couldn't talk to them so much. It was difficult for me to communicate with them. But I tried to talk with them through making Dorayaki time. I found that I had to study English harder. It was interesting to talk with them, so I want to be able to speak English well and talk to them more.</p> <p>I learned not only Japanese food and culture, but also importance of communication. The second grade high school students' presentation was also interesting for me. It was easy to understand. I want to be like them. After the seminar, we took a lot of pictures. I exchanged one of the foreign student's address and after that, I started keeping in touch with her in English, because our common language is English. I was able to learn many things today. I will join it next year, too.</p>
--

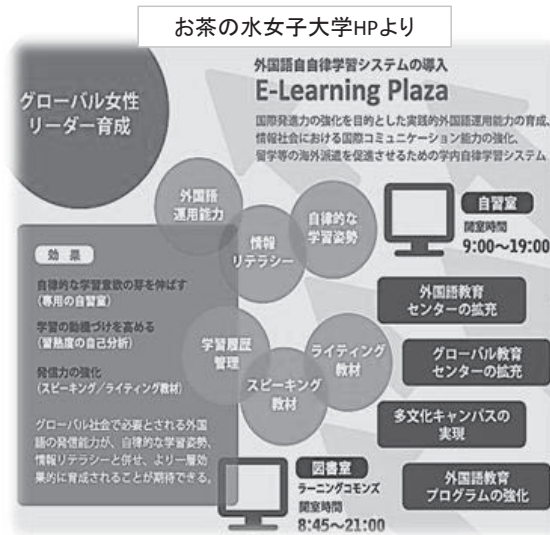
3.3.B. e-learning システムの活用

書式1 (希望者用)

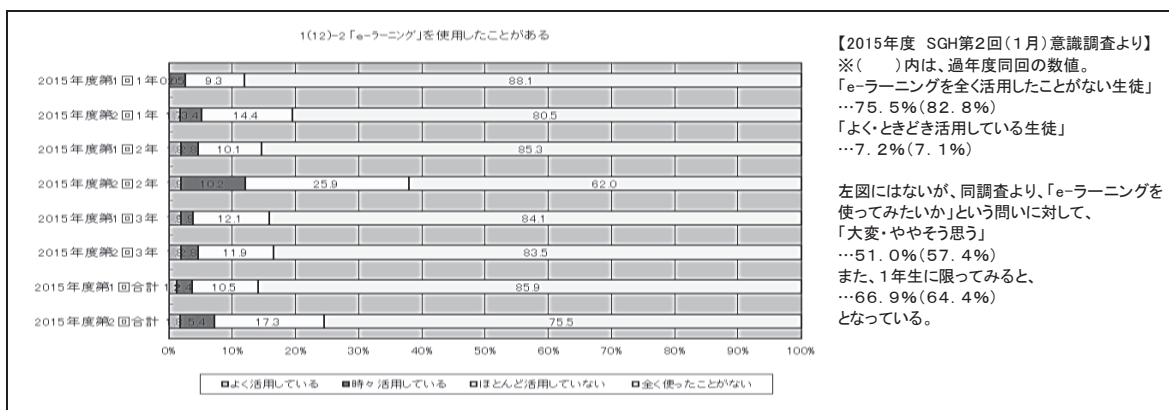
SGH(教養教育)事業報告書

担当者: 津久井 貴之

事業名	e-learningシステムの活用
実施日時	随時
場所	お茶の水女子大学
対象者 (参加者数)	希望者
連絡先 (担当者など)	外国語教育センター
実施概要	<p>大学内のe-learningシステムを活用できるように、全生徒にIDを付与し、生徒が随時活用できるようにした。また、e-learningで取り入れられている自習用言語学習プログラムの紹介や施設の案内について要項を作成し、全生徒に配布し、活用を促した。</p> <p>2年生の「コミュニケーション英語Ⅱ」の時間に、実際に施設を訪れてe-learningを実際に体験させた。</p> <p>1年生の「教養基礎英語」(学校設定科目)の時間に作成した要項を用いてガイダンスを行った。</p>



アンケート集計結果



アンケート結果及び分析

同じキャンパス内にある利点を生かして、大学施設を利用した取組の1つとして、e-learningの活用を促していく必要がある。授業等でオリエンテーションの時間を確保するだけでなく、本年度の2年生のように、実際に施設を訪れて施設の利用の仕方やソフトの使用方法を学習する機会がもてるとよいであろう。

e-learningを主管している外国語教育センターでは、スタッフが英語学習に関する質問を受けたり英語学習に関する書籍やDVDなどを貸し出してくれるサービスも行っているため、そうした利点も周知しながら、活用を促していきたい。e-learningへの高い関心を実際の活用につなげていけるか、工夫していきたい。

3.4. その他

3.4.A. 統計を用いた課題解決

書式2 (全員用)

SGH事業(教養教育)報告書

担当者: 十九浦 美里

事業名	教養基礎「数学Ⅰ」特別授業「統計を用いた課題解決」
実施日時	2016年 1月 28日(木) 13:12 ~ 14:50
場所	お茶の水女子大学 本館 306教室
対象者 (参加者数)	1年生全員 (118人)
連携先	慶応義塾大学大学院教授 渡辺美智子 氏
実施概要	<p>【講義の主な内容】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 統計学とは何か。 2. 社会で統計学がどのように活かされているか。 3. 今後の社会における統計学の可能性 4. 統計を用いた問題解決の手法(PPDACメソッド※など)～実践例の紹介～ 5. 統計に関するコンテストの紹介 <p>この授業を受けて、数学Ⅰでは「データの分析」の課題活動として、「生徒が自分たちで課題を設定し、データを用いて分析する」というグループ学習を行う。生徒たちは、さらに2年次に、総合的な学習の時間「持続可能な探究Ⅰ」で課題探究を行うこととなるが、その中で生徒が主体的にデータを活用して探究を深めることにつながることを期待する。</p> <p>※Problem/Plan/Data/Analysis/Conclusionのプロセスを順に実施する統計学の問題解決フレームワーク</p>

アンケート集計結果 (回答数: 118)

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうでない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2. 統計に対する興味・関心が向上した	57人	48.3%	48人	40.7%	11人	9.3%	2人	1.7%
3. 統計の有用性が実感できた	85人	72.0%	30人	25.4%	3人	2.5%	0人	0.0%
4. 今後の課題解決の参考になった	55人	46.6%	52人	44.1%	10人	8.5%	1人	0.8%
5. 次の機会にも期待している	45人	38.1%	48人	40.7%	12人	10.2%	0人	0.0%

アンケート結果を踏まえた分析

アンケートの結果から、「統計に対する興味・関心が向上した」という項目で「4そうである」、「3どちらかというそうである」合わせると約9割、「統計の有用性が実感できた」という項目では約9.7割となっており、今回の授業によって生徒の統計に対する意識が非常に高まったと考えられる。事前に数学Ⅰの授業で「データの分析」を学習していることが、より具体的なイメージにもつながり、統計の有用性を実感し、なぜ勉強しているのかがよくわかったという感想も多くみられた。また、「今後の課題解決の参考になった」という項目でも9割以上の生徒が「4そうである」または「3どちらかというそうである」を解答しており、感想にも「来年度の『持続可能な社会の探究Ⅰ』の授業などで、統計を効果的に利用していきたい。」など、意欲的なコメントが多く、今回の授業は今後の探究的な学習に向けても非常に有効であったのではないかと考えられる。

4. 連携・評価・発信グループの取組

4.1. 取組の概要

本年度から新設した連携・評価・発信グループは、SGH 事業における研究開発全般の総合調整を担う研究部に所属する教員が兼務し、研究部とともに校内の各グループ・教員単位で進める取組の進捗状況や課題等を把握し、各取組の連携を促したほか、事業の推進に当たり本校が指導・助言・協力等を得ている管理機関や他大学、文部科学省等の関係機関との連携強化、他のSGH 指定校等との交流促進、本校生徒の意識やグローバル・リーダーとしての資質・能力を把握するための調査等の実施、同調査の結果や管理機関等からの助言なども踏まえた教育評価のあり方の検討、公開教育研究会やホームページ、パンフレット等を活用した事業成果の普及などを進めた。

○研究部と連動した本校における研究開発全般の総合調整

校内の各グループ・教員単位で進める個々の取組の進捗状況や課題等を把握し、研究部会や教員会議等において、主に、校内外との連携や教育評価、取組成果の普及の観点から報告・提案を行い、校内及び管理機関との情報・課題意識の共有を図りつつ研究開発を推進した。

特に、平成27年8月に全教員を対象に実施した校内研修会では、本校のSGH 事業の進捗状況を細部に渡り確認し、来年度から開講予定の科目・講座の具体的な教育内容・方法を中心に、今後の課題探究型学習の進め方や教育評価のあり方について協議する機会を設けた。協議においては、全ての教員から事業に対する率直な意見を聴取するとともに、グループディスカッションにより具体的な提言をまとめ発表するよう求めた。これにより、研究開発及び事業運営について様々な観点から課題を発見・整理することができ、今後の取組の方向性について、各教員間の意識の共有を図ることができた。

なお、こうした工夫を通じて、各教員の課題意識の向上や教員間の活発な議論の促進が図られ、2・3年次の「総合的な学習の時間」及び2年次の海外研修の教育課程上の位置付け、内容及び実施体制等について、本年度までの取組の課題や効果を検証し、更なる教育効果の向上と過重になりがちな生徒の負担解消を図るための改善策について校内で検討を重ねた。管理機関や文部科学省からの助言も踏まえ、来年度からの教育課程の変更も含めた大幅な改善(※)を加えることを決定し、実施に向けて校内体制の整備や教育内容・方法の検討等の準備を進めた。

(※)「総合的な学習の時間」については、2年次選択必修「グローバル総合」及び3年次選択「グローバル総合アドバンス」を廃止し、2年次必修「持続可能な社会の探究Ⅰ」及び3年次必修「持続可能な社会の探究Ⅱ」にそれぞれ統合し、2年次の選択講座の充実や3年次の探究活動の質の向上等を図ることとした。また、海外研修については、「持続可能な社会の探究Ⅰ」の特定の講座の履修生のみを対象とするのではなく、参加を希望する2学年の生徒を対象に広く校内選考を行い、特別活動として実施することとした。

○管理機関の支援体制強化のための体制整備

管理機関であるお茶の水女子大学による支援体制を強化し、同学の教育資源の更なる活用、高大連携特別教育プログラムの充実を図るため、大学教員8名から構成される「アドバイザーボード」の正式な設置を依頼した。アドバイザーボードからは、SGH 事業の研究開発及び運営のあり方も含め、本校の教育研究及び学校運営全般に対する指導・助言を得るほか、課

題探究型学習の推進に資する大学の教職員や研究者、学生(外国人留学生を含む)の本校授業・課外活動への派遣，生徒の外国語・コミュニケーション能力の向上や国際交流・異文化体験・理解の機会拡充に資する大学主催の企画・イベント等への本校生徒及び教員の招致，大学の e-learning システム等の本校生徒への使用開放など，多岐に渡って協力を得た。

○高大連携の促進等に向けた東京工業大学との連携強化

本校は，お茶の水女子大学のほか，平成 24 年度より東京工業大学とも高大連携教育を実施しており，理工系に優れた生徒の育成に向けた高大連携教育システムの構築を目指し，研究開発を進めている。これまで実施した教育プログラムの内容や高大連携特別選抜の実績等を踏まえ，本年1月，本校の管理職及び研究部長と東京工業大学担当副学長・理事の間で意見交換を行い，今後の教育プログラムや研究開発の進め方の方向性について議論するとともに，本校の SGH 事業，特に，未来のグローバル・リーダーの育成に向けて，高等学校段階ではどのような教育を行い，生徒にどのような資質・能力を身に付けさせる必要があるかといった観点から，助言を得た。今後も同大学と今後の連携のあり方についての検討を続け，事業や連携教育の改善のほか，進路指導等にも役立てていく予定である。

○他の SGH 指定校等との交流促進

平成 27 年 10 月に開催された「全国国立大学附属学校連盟(全附連)大会高等学校部会教育研究大会」において，SGH 又は SGH アソシエイトに指定されている他の国立大学附属高等学校及び中等教育学校の管理職・研究主任等とともに，各校の SGH 事業の現状や課題等について情報交換及び協議を行い，本校の事業の推進や改善の参考とした。

また，同 12 月に開催された「平成 27 年度第 2 回スーパーグローバルハイスクール(SGH)連絡会及び連絡協議会」に際し，本校及び筑波大学附属高等学校が中核となって，SGH に指定されている国立大学附属高等学校及び中等教育学校 9 校による情報交換昼食会を開催し，各校の当面の課題を中心に情報収集・意見交換等を行う機会を設け，特に国立大学が管理機関であることによる強み・課題の共有や互いの取組への助言，今後の各校間の協力・連携のあり方に係る検討等を行った。また，他の SGH 指定校が主催する生徒の成果発表会への本校生徒の派遣なども実施した。

○生徒の意識・能力等に関する調査の実施 ※分析結果は 4.2 節参照

平成 27 年 4 月及び平成 28 年 1 月，本校の全ての生徒を対象に，SGH の取組も含めた本校の教育方針・内容・方法や，高等学校での学習を通して伸ばしたい資質・能力，自らの進路，その他学校行事・特別活動も含めた学校生活全般に関する意識調査を実施した。特に，第 2 回目の調査では，第 1 回目調査の結果との比較分析，過去 2 年分の調査結果との比較分析も行い，本校生徒の実態・特性等を把握した。さらに，調査結果及びその分析を踏まえた今後の教育研究の方向性について，職員会議等において報告・提言し，各グループでの検討や各教員の授業等の改善の参考とするよう促した。また，平成 27 年 12 月から平成 28 年 1 月にかけて，保護者を対象に本校の SGH 事業に対するアンケート調査を実施し，その結果についても校内で共有した。

さらに，本年度は，株式会社ベネッセコーポレーションが研究開発を行っている「グローバルリ

テラシー&スキルテスト」(仮称、以下「GLS テスト」という。)のサンプル調査に協力し、年 2 回、1・2 学年の生徒が受検した。GLS テストは SGH 指定校のような学力水準が比較的高い高等学校等の生徒を主たる受検対象とし、選択・記述式問題、論述式問題及びアンケートを通して、グローバル社会で起こり得る課題等について与えられた資料から適切な情報を読み取り、他者とも協同しながら課題の発見・解決を図る力や、グローバル・リーダーに必要な姿勢・意欲・態度などを測定するものであり、来年度から GPS-Academic(以下「GPS」という。)として本格的に実施される予定である。今後、本調査を導入する高等学校等も少なくないものと想定され、生徒がある程度客観的な指標に基づいて自分自身の能力や適性を把握し、今後の学習に役立てるとともに、教員も本校生徒の特性を把握した上で指導の改善を図ることができるよう、本校でも来年度より GPS を年 1 回、1・2 学年の生徒を対象に実施する方向で検討している。

○OSGH としての授業や特別活動に係る教育評価のあり方の検討

本年度より、「持続可能な社会の探究 I」及び「グローバル総合」の講座「国際関係と課題解決」を中心に、ループブック評価の研究・試行に取り組んできたが、これを基に、管理機関(特に、アドバイザリーボード)や本校 SGH 運営指導委員会等からの助言も得つつ、評価項目・方法等の見直しに向けた検討を行った。早ければ来年度中から、「総合的な学習の時間」を中心に各教科等において共通の評価項目・方法・様式を用いた新たな教育評価を導入することを目指し、素案の作成にも着手した。

○事業や生徒の課題探究の過程及び成果の普及

昨年度本校のホームページの中に新たに開設した SGH 専用ページにおいて、本校の具体的な取組内容について計 31 件(平成 27 年 2 月末現在)の報告を行った。

また、本校の SGH としての取組を周知するために昨年度作成・配布したパンフレットの内容を見直し、特に、「グローバル総合」の各講座における年間を通じた課題探究の様子や生徒の所感を掲載する等の改善を加え、事業の成果報告書や生徒論文集とともに、受験生及びその保護者を対象とした学校説明会や公開教育研究会、全附連高等学校部会教育研究大会で配布するなどして広く周知した。

さらに、管理機関や運営指導委員会からの指摘及び校内での議論も踏まえ、公開教育研究会(平成 27 年 11 月開催)に際して、「グローバル総合」の講座の一つである「国際協力とジェンダー」及び「国語総合」、「音楽 II」、「コミュニケーション英語 I」の研究授業を、運営指導委員会(平成 27 年 6 月、平成 28 年 3 月の計 2 回開催)に際して「グローバル総合」各講座の授業公開や生徒による論文発表会を実施し、特に、通常の授業において取り組んでいる生徒間のグループディスカッションや生徒によるプレゼンテーションといった探究の過程を外部に公開することとした。これにより、本校の SGH としての取組の過程や成果を、実際に探究活動に取り組む生徒の様子を通じて広く公表することが可能となったことはもとより、生徒自ら聴衆を意識し発表内容・方法等を工夫するなど探究活動の質の向上を目指すようになったほか、生徒の取組や教員の指導等に対してより具体的かつ多角的な観点から指導・助言を得ることが可能となり、生徒・教員とも自らの学習・指導の進め方を見直し、改善を加える機会を得ることができた。

このほか、「グローバル総合」の各講座では、生徒自ら SNS を活用して探究活動の過程や成果を対外的に発信するなどの試行も見られた。

4.2. 生徒の意識調査（質問紙調査）の結果及び分析

4.2.1. 調査概要

4 月末及び 1 月上旬の年 2 回、全生徒に対して SGH の取組や進路、本校のカリキュラムの特徴などに対する生徒の意識、関心の変化や身に付けさせたい能力や資質に関する自己評価を質問紙による 5 段階評価で調査した。（結果詳細については、「関係資料 3」を参照。）以下は、主だった調査結果及びその分析である。（特に記載のない場合、回答率は本年度第 2 回調査の結果を引用し、「大変そう思う」と「やや思う」を合算した割合を表す。）

4.2.2 意識調査全体の概観

1) SGH の取組全体に対する好意的な評価

8 割近い生徒が SGH の取組を「面白そうである」、また、9 割を超える生徒が「課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ」と回答している。SGH の様々なプログラムやその中核である課題探究型の学習への関心の高さとそうした学習自体への価値を見いだしていることがうかがえる。

2) 身に付けたい、伸ばしたい資質・能力の上位は、「プレゼンテーション」「英語活用」「教養」

本校 SGH 研究の目指す様々な基礎的・汎用的能力のうち、「プレゼンテーション能力」と回答した生徒は 6 割を超える。また、「英語を活用する力」や「幅広い教養」をそれぞれ 6 割近い生徒が「身に付けたい」としている。更に具体的には、「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい」や「成果や提案などを効果的に伝えたり論文を書けたりするようになりたい」と回答した生徒は 95% を超えており、英語を活用した探究成果の発信に強い関心を抱いている。「プレゼンテーション能力を高めたい」と回答した生徒の回答率の高さ(96.3%)と合わせて、そうした場面を計画的に設定したり、外部の発表機会を積極的に紹介したりすることを検討していきたい。

また、課題探究型の学習のあらゆる場面で欠かせない「論理的思考力」についても、生徒は「将来の役に立つ」(95.1%)、「高めたい」(94.9%)と考えており、各教科・領域をまたいで、論理的思考力を高める活動や教材の開発・改善に努めていくことで、生徒のニーズに応じたカリキュラムの展開と能力の向上を図ることができると考える。

3) 「できる」と生徒自身が感じていることと実際のパフォーマンスの関係

以下の態度や能力については、生徒の自己評価が高い一方、「持続可能な社会の探究 I」や「グローバル総合」での取組や課外活動の様子、サンプル調査で参加した「グローバルリテラシー・スキルテスト(ベネッセ、以下 GLS)」等から見ると、実際に行動につながっていなかったり、逆に各講座から課題として挙げられたりするなど、ギャップがあるように感じられる部分である。

- ・自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたい。(73.5%)

⇒GLS や課外活動の状況からすると、実際に社会貢献や自己研鑽活動に参加したと答えた生徒は少ない。

- ・必要に応じて他者と協力して活動を進められる。(79.4%)

⇒探究活動の様子を観察したり、活動の様子について生徒から相談を受けたりすると、他者と協働してあるタスクを効率よく解決したり、効果的なアイデアや提案を生み出したりするという部分が弱いようである。「計画通りに仕事を進めてくれない人がいる」、「一部の生徒に負担が偏ってしまう」、「活動に消極的だったり問題を抱えていたりする生徒にうまく働きかけて積極

的な参加を促せていない」などが活動中の様子や活動後の生徒の声として挙げられる。

また、GLSの結果では、「協働的な問題解決の力」や「コミュニケーション力」、「論理的な説明力」や「目標を設定し見通しをもって集団で活動を進めるリーダーシップ」などが比較的弱いという結果が出ており、来年度以降、特に「グローバル地理(1年次)」「持続可能な社会の探究Ⅰ(2年次)」と積み上げていく探究活動のまとめとして位置する「持続可能な社会の探究Ⅱ(3年次)」で具体的なスキルとして伸ばしていけるよう、工夫していく必要がある。

自己効用感やメタ認知を高めることは大切であるが、意識と行動の面でズレがあるのも事実であろう。パフォーマンス評価やポートフォリオ的なアプローチからの評価について今後更に研究を進めていく中で、それぞれの態度や能力の目指す到達度についてルーブリックを作成・運用して生徒と教師が共通理解を図るとともに、自律的に自身の取組を振り返ることのできる生徒を育てていく必要がある。

4.2.3. 前回調査との比較

※()内は第1回→第2回の「大変+ややそう思う」、または「だいたい+できることもある」の回答率を表す。

1) 2・3年生に顕著な伸びがみられる基礎的・汎用的能力

・自主的に探究課題を発見できる。(2年生:56.8→70.4%, 3年生:57.9→64.9%)

・自分の意見を聴衆の前で述べることができ、質問にも応じられる。

(2年生「だいたいできる」:12.7→30.2%)

・相手の主張と根拠の間に飛躍や誤りがないかを意識して相手の発表を聞いたり、論文などを読んだりできる。(2年生「だいたいできる」:9.3→26.7%)

本調査から、「持続可能な社会の探究Ⅰ」及び「グローバル総合(アドバンス含む)」の探究活動と上記の結果に明確な因果関係を説明することはできないが、1年間探究活動を行うことが何らかの効果をもたらしているのではないかと思われる。また、「論理的な文章を書ける」と回答した生徒も特に2年生に増えているが、「だいたいできる」と回答した生徒は18.9%(第1回は9.6%)に過ぎず、より多くの生徒の能力を高めていく必要があるだろう。

今後は、教科の学習において上記の能力が鍛えられたり、探究活動で試されたりする経験の蓄積がより多くの生徒のそうした能力の確実な伸長につながるよう、更なる改善を進めたい。

2) 探究活動で活用するなかで更に高めたい英語の技能

・なじみのあるトピックならニュースの要点について、英語で議論できる。

(30.9→47.0% ※特に1年生は、15.9→40.7%で+24.8ポイント伸びている。)

・学んだトピックや興味や経験の範囲内なら、抽象的でも英語で議論できる。(29.8→42.2%)

・そのトピックについて知っていれば、まとまりのある文を書ける。

(38.9→51.6% ※2年生では6割を超える生徒が「書ける」と回答し、1年生では「だいたい」と回答した率が17倍、3年生では2倍に伸びている。)

英語に関する上記項目3点では、いずれも「できる」と回答した生徒が増えているが、3年生の回答率が相対的に低めであり、選択科目履修の幅が広がる3年次に、より多くの生徒が英語で議論する機会を確保する難しさや、議論する内容自体の高度化に伴い、逆に英語で表現できる範囲が限られてしまうことが原因として考えられる。来年度は「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」が全員履修となるため、英語を発信するための言語として絡めた取組の中で、より多くの生徒が教科で培った英語の力を活用する場面が増えると考えられる。

また、探究活動の成果や課題について議論をしたりレポートとしてまとめたりすることを日本語で行うのと同じレベルで英語で行うのは困難であっても、そうした機会を多く体験することで、英語運用上の課題をとらえて目的をもって英語学習に取り組むきっかけとすることができる。

4.2.4 過年度の調査との比較

※()内は2014と2015年度の同回(第2回)の「大変+ややそう思う」、または「だいたい+できることもある」の回答率の比較を表す。(2014年度の割合/2015年度)

ここでは、SGHに指定されて入学してきた1年生に顕著にみられる変化やSGHカリキュラムの変更に何らかの影響があると思われる項目をいくつか挙げておきたい。もちろん、本調査の結果のみをもって因果関係を説明することにはならないが、来年度以降の取組、特に新たに始まるものや変更した部分についてよりよい改善となるよう、生徒の実態を引き続き追っていきたい。

1) SGHの取組、大学の専攻分野の選択に影響を与えると考える1年生の増加(51.2%/71.2%)

2) 国際化に重点を置く大学へ進学したいと考える1年生の増加(43.8%/51.7%)

3) 可能であれば海外の大学に進学したいと思う生徒の増減

現2年生は、1→2年生で「全くそうは思わない」と回答した生徒が+10.5ポイント、逆に現3年生は、2→3年で「大変+ややそう思う」と回答した生徒が+14.8ポイントとなっている。

4) 「総合的な学習の時間」を通して現代社会の諸課題について関心を高められると考える生徒の増減(1・2年ともに増加し、1年生:73.5%/88.2%, 2年生:67.3%/86.1%)

2年生の経年比較をみると、73.5%→86.1%その関心は高まっており、SGH研究2年目の取組が何らかの影響を与えているのかもしれない。また、8割近い3年生は、関心を高められると考えている。現3年生は、「グローバル総合アドバンス」を履修していた生徒が5名であったにも関わらず、過去の「総合的な学習の時間」での取組や自身の関心・意欲の変化について前向きに評価している。来年度は、3年次においてより多くの生徒について、こうした意欲を維持したり、更に高めたりできるように「持続可能な社会の探究Ⅱ」として全員履修にカリキュラムが変更される。影響を追跡してゆく必要がある。

5) 現代社会の諸課題についてもっと学習したいと思う2年生の増加

(2年生「大変そう思う」:29.7%/42.6%)

1年間の「グローバル総合」及び「持続可能な社会の探究Ⅰ」での探究活動では、半数以上の生徒が両方の探究活動を同時並行で行っていた状況や負担を考えると、来年度は探究活動を「持続可能な社会の探究Ⅰ」に一本化し、全員履修とすることで生徒のニーズに応えていける体制を取れると考える。また、現2年生の学習意欲を、同じく来年度から全員履修の「持続可能な社会の探究Ⅱ」に変更したことで、更に伸ばしていけるよう、新しいカリキュラム作りを進めていきたい。

5. 次年度以降の課題及び改善点

○ 2・3年次の「総合的な学習の時間」及び2年次の海外研修の研究開発並びに試行

来年度より、本校では、新たな教育課程の下で、2・3年次の「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」を開講し、2年次の海外研修を実施することとなる。既に、各科目・講座及び海外研修の実施体制を決定し、開講に向けた準備や研修内容の詳細の検討、対象生徒の募集なども進めているが、過去2年間の実績や課題、管理機関や運営指導委員会等からの助言、生徒や保護者の意向なども踏まえつつ、引き続き教育内容・方法等の研究開発を進め、教育実践を行っていく必要がある。

特に、指定3年目の来年度においては、生徒主導による探究活動の質の向上、探究活動の過程や成果物の制作に当たっての外国語活用能力の向上、SGHの取組の中で研究開発を進めた探究型学習の他の教科等への更なる応用などを目標に掲げ、研究開発を進めることとしたい。具体的には、各教科等において、生徒間の活発なディスカッションや互いのプレゼンテーションに対する質疑応答等を通じた探究内容の深まりを促すほか、より実践的な外国語活用能力の向上を図るため、2・3年次必修の「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」を中心に、本年度「グローバル総合」の各講座で実施した英語によるディスカッションや論文要旨の作成等に引き続き取り組ませることに加え、英字新聞の制作、海外の協定校の生徒等とのインターネットを活用した交流などの課題を課し、英語科教員や外国人講師、留学生による添削指導等の機会を設けることを検討している。

○ SGHとしての授業や特別活動に係る教育評価のあり方の検討

来年度より、これまで「持続可能な社会の探究Ⅰ」及び「グローバル総合」を中心に試行してきた評価項目・方法等を基に、更なる改善を加えた新たな教育評価を試行していく予定である。既に、研究部及び連携・評価・発信グループを中心に、管理機関や運営指導委員会等からの助言も得つつ見直しに向けた検討を進めているが、来年度中に新たな評価方式を定め、校内で試行していくこととしたい。

○ 個々の教員の負担軽減

いわゆる小規模校である本校では、専任の教職員も少なく、非常勤の教職員も含めた全ての教職員が、SGHの事業運営及び研究開発を含めた学校運営に係る複数の業務を担当している状況にある。SGHとしての指定期間終了後の学校運営及び教育研究のあり方も見据えつつ、管理機関の支援も得ながら校内の業務改善に努め、生徒たち一人ひとりの関心や目的意識等に応じた学習機会の充実を図ることができるよう、教職員が個々の能力を発揮できる環境整備を図っていく必要がある。

関係資料 1

目標設定シート項目の実績

(1-d)グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い大会における入賞実績

1年生	私たちの身の回りの環境地図作品展(環境地図教育研究会)	努力賞
2年生	アジア・ユースリーダーズ(中国・天津市のゴミ問題解決に向けた提言案を競うプログラム)	一位
2年生	アジア・ユースリーダーズ(中国・天津市のゴミ問題解決に向けた提言案を競うプログラム)	二位
2年生	アジア・ユースリーダーズ(中国・天津市のゴミ問題解決に向けた提言案を競うプログラム)	三位
1年生 2年生	中央大学第15回高校生地球環境論文賞	優秀賞(2名)
2年生	中央大学第15回高校生地球環境論文賞	佳作(3名)
1年生	中央大学第15回高校生地球環境論文賞	入選(9名)
1年生	金融と経済を考える高校生小論文コンクール	佳作(4名)
1年生	NRI(野村総合研究所)学生小論文コンテスト2015	奨励賞(2名)
2年生	第5回高校生環境活動発表会 全国大会	優秀賞(5名)
2年生	第18回全国中学高校 Web コンテスト	経済産業大臣賞 ・プラチナ賞 (5名)
2年生	第18回全国中学高校 Web コンテスト	金賞(3名)
2年生	第18回全国中学高校 Web コンテスト	銀賞(3名)
2年生	第16回 日経 STOCK リーグレポートコンテスト(高校部門)	審査員特別賞 (4名)
2年生	第16回 日経 STOCK リーグレポートコンテスト(高校部門)	入選(4名)

(2-a)課題研究に関する国外の研修参加者数

イオン アジア・ユースリーダーズ(ベトナム)	6名
台湾研修	42名

(2-d)課題研究に関して大学教員および学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)

お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 教授 戸谷陽子氏	1名×1回
お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 教授 浜野隆氏	1名×1回
お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 教授 三浦徹氏	1名×1回
お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 准教授 長谷川直子氏	1名×1回
お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 教授 水野勲氏	1名×1回
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 客員教授 宮内篤氏	1名×1回
東京大学社会科学研究所 教授 宇野重規氏	1名×1回
京都女子大学 発達教育学部 教授 内海成治氏	1名×1回
沖縄国際大学法学部地域行政学科 教授 佐藤学氏	1人×1回

慶応大学大学院健康マネジメント研究科 教授 渡辺美智子氏	1人×1回
宮城教育大学教育復興支援センター 特任准教授 小田隆史氏	1人×1回
お茶の水女子大学 図書・情報課長 森いづみ氏	1人×1回
お茶の水女子大学 留学生(中国, タイ, ロシア, ハンガリー)	4名×5回
お茶の水女子大学 学生(理学部情報科学科)4名	4名×1回

(2-e) 課題研究に関して企業または国際機関等の外部人材が参画した延べ回数

日本 IBM 塚本亜紀氏 榎美紀氏	2人×1回
パタゴニア日本支社 日本支社長 辻井隆行氏	1人×1回
アイ・シー・ネット株式会社 日暮良治氏	1人×1回
イオン株式会社 中ノ理子氏	1人×1回
公益財団法人ジョイセフ 矢口真琴氏	1人×1回
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター教育協力部部長 進藤由美氏 齋藤美貴氏	2人×1回
JICA 国際協力出前講座 講師 北林牧氏	1人×1回
独立行政法人国際協力機構 川淵貴代氏(本校卒業生)	1人×1回
元 UMHCR 広報官 西村洋子氏(本校卒業生)	1人×1回
元国会原発事故調査委員会 調査員 石橋哲氏	1人×1回
元読売新聞社記者 フリーライター 相川祐里奈氏	1人×1回
日本マイクロソフト株式会社 テクニカルエヴァンジェリスト 渡辺弘之氏	1人×1回
日本マイクロソフト株式会社 テクニカルエヴァンジェリスト 戸倉彩氏	1人×1回
ソニー株式会社 有松和之氏, 赤羽進亮氏 株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメント 内山直子氏	3人×1回

(2-f) グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い大会における参加者数

第9回全国高校模擬国連大会	4名
第16回日経 STOCK リーグ	17名
日本地理学会 2015 秋季学術大会 高校生の部 ポスター発表	9名
日本地理学会 2016 春季学術大会 高校生の部 ポスター発表	14名
全国中学校 Web コンテスト	17名
全国ユース環境活動発表大会	11名
AEON eco-1 グランプリ 首都圏ブロック大会	5名
アプリ甲子園	7名
Mono-Coto Innovation 2015	3名

関係資料 2

【第 1 回 SGH 運営指導委員会】

1 日時 2015 年 6 月 8 日(月) 13:00~17:00

(13:00~14:50 高校にて「持続可能な社会の探究 I」,「グローバル総合」の授業参観)

2 場所 お茶の水女子大学 第一会議室

3 出席者

- ・運営指導委員 黒河内久美 (公財)国連大学協力会・評議員
楠見 孝 京都大学 大学院教育学研究科教授
永井 裕久 筑波大学大学院ビジネスサイエンス系教授
根津 朋実 筑波大学大学院人間系准教授
田村 知子 岐阜大学大学院教育学研究科 准教授
- ・管理機関(お茶の水女子大学)
真島 秀行 副学長 学校教育支援・社会連携担当 教授
耳塚 寛明 基幹研究院 人間科学系 教授
清水 徹郎 基幹研究院 人文科学系 准教授
富士原紀絵 基幹研究院 人間科学系 准教授
- ・校内出席者 村田容常 校長・基幹研究院 自然科学系 教授
菊池美千世 副校長
連携・評価・発信グループ
阿部真由美(研究部長), 津久井貴之, 松野翔太,
三橋一行, 今成智美
課題研究グループ
北原武, 増田かやの, 葭内ありさ, 沼畑早苗,
朝倉彬, 玉谷直子, 畠山俊
教養教育グループ 全教員

4 会議次第

- (1)校長より開会あいさつ (2)管理機関の取組について (3)高校の取組について
(4)運営指導委員より (5)協議

5 運営指導委員よりいただいたご意見

- ・グローバル総合の取組みは、「大人が作ったありものに高校生が乗る」という図式が見られるので、「高校生が企画していく」という発想もあってもよいのではないかと。
- ・(実際に担当している教員の負担に關しての改善策として)筑波大附属は大学の教員が海外研修と評価を行っている。専門分野や効果測定を大学に依頼する、外国人講師の活用など、アウトソースしていくことが大事。
- ・FW 先へのアポを生徒たちで取ってくるというのは非常によい経験。企業もオープンになってきているので今後も続けてほしい。企業にとっては CSR、CSV といった視点がある。
- ・FW の報告書の形式を指定せず生徒に考えさせていたが、今まではアカデミック・スキル、リサーチ・スキルをトレーニングしてから取り組ませる手法をとる学校を多く見てきた。どちらが先がよいかは難しい問題だと思う。

- ・3年間を通して身に付けておいてほしい資質は、思考力が最も大事だと考える。思考力には、課題解決力・批判的思考力・問題解決や意思決定などの実際のアクションを含んでいる。
- ・河合塾とリアセックの調査 PROG では、「女性のほうがリテラシー(情報や知識の活用能力)が高いがコンピテンシー(行動特性)が低く、コンピテンシーの中でも親和力が高いが課題解決力や計画実行力、統率力は低い傾向にある」という結果が出ている。こちらの取組みは女性が低い分野での活躍につながっていくのではないか。
- ・総合的な学習の時間だけでなく、教科の中でも課題解決的な取組みをしてゆくとよい。
- ・昨年度の論文発表会の VTR を見た。ばらつきがあり、自分たちがわかっていたらよいという発表も見受けられた。リーダーたる者、自分の考えを持つと同時に、それを伝えることが必要。

【第2回 SGH 運営指導委員会】 (※実施予定)

1 日時 2016年3月22日(火) 12:45～17:45

(13:00～15:10 「SGH 論文発表会」を参観)

2 場所 お茶の水女子大学 第一会議室

3 出席者

- ・運営指導委員 黒河内久美 (公財)国連大学協力会・評議員
内海 成治 京都女子大学発達教育学部 教授
楠見 孝 京都大学 大学院教育学研究科教授
永井 裕久 筑波大学大学院ビジネスサイエンス系教授
根津 朋実 筑波大学大学院人間系准教授
田村 知子 岐阜大学大学院教育学研究科 准教授
- ・管理機関(お茶の水女子大学)
真島 秀行 副学長 学校教育支援・社会連携担当 教授
耳塚 寛明 基幹研究院 人間科学系 教授
清水 徹郎 基幹研究院 人文科学系 准教授
富士原紀絵 基幹研究院 人間科学系 准教授
- ・校内出席者 村田容常 校長・基幹研究院 自然科学系 教授
菊池美千世 副校長
連携・評価・発信グループ
阿部真由美(研究部長), 津久井貴之, 松野翔太,
三橋一行, 今成智美
課題研究グループ
北原武, 増田かやの, 葭内ありさ, 沼畑早苗,
朝倉彬, 玉谷直子, 畠山俊
教養教育グループ 全教員

4 会議次第

- | | | |
|---------------|----------------|--------------|
| (1)校長より開会あいさつ | (2)管理機関の取組について | (3)高校の取組について |
| (4)運営指導委員より | (5)協議 | |

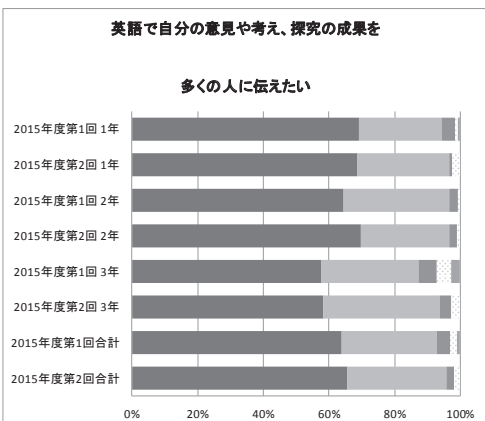
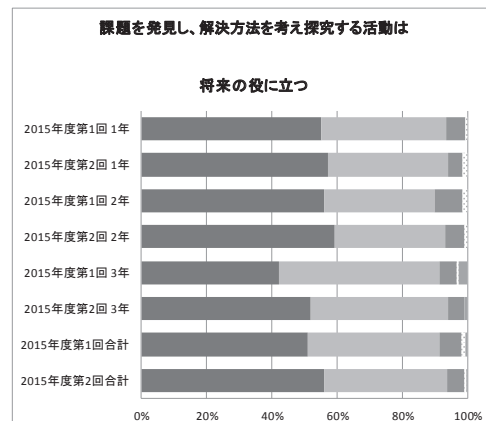
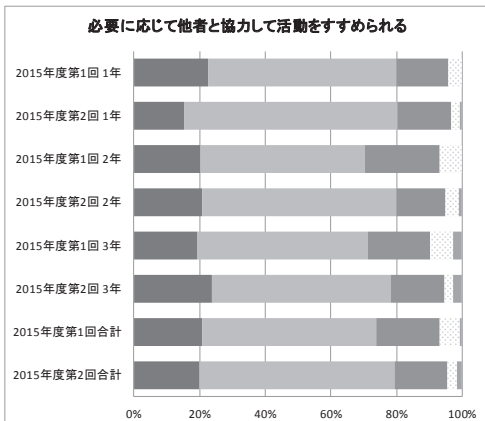
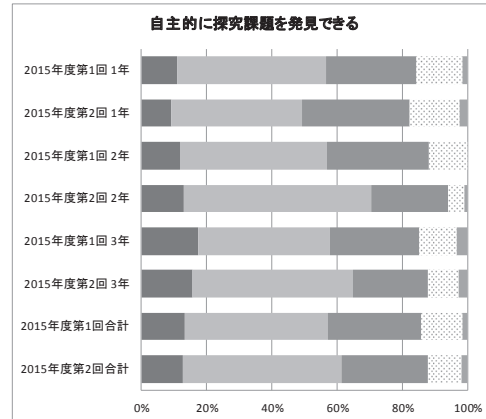
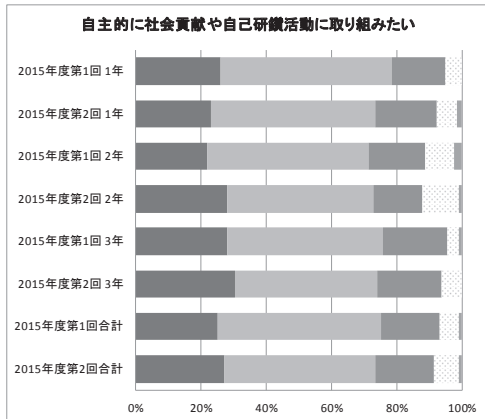
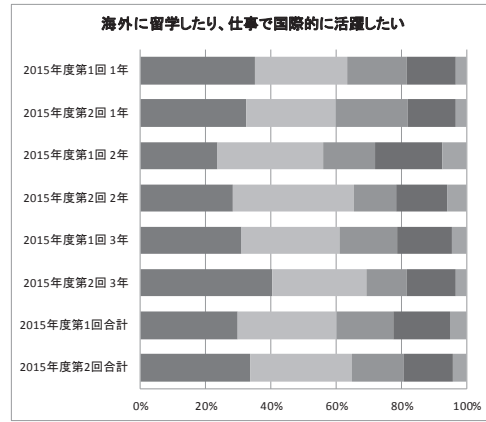
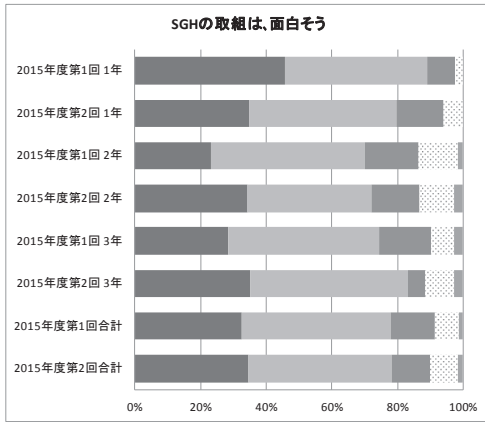
関係資料 3

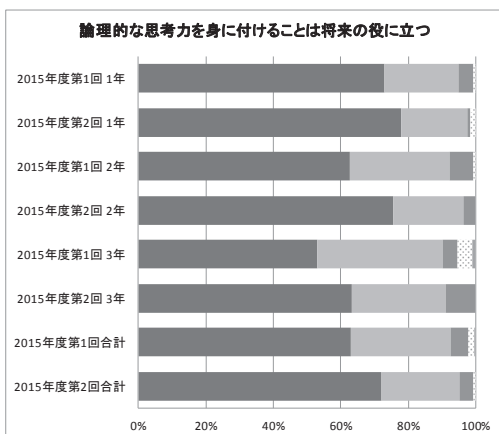
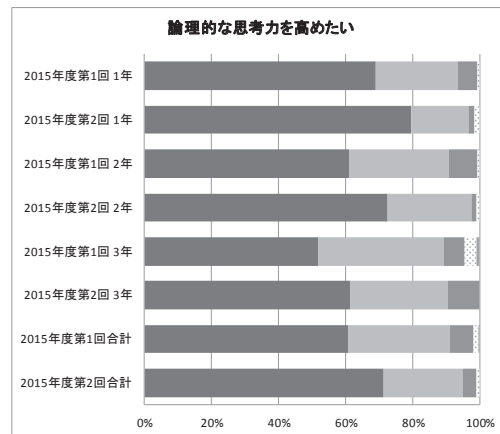
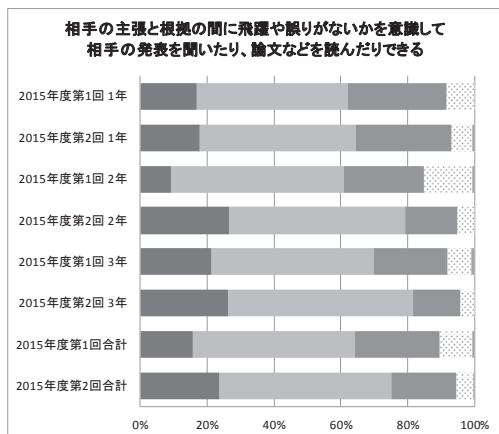
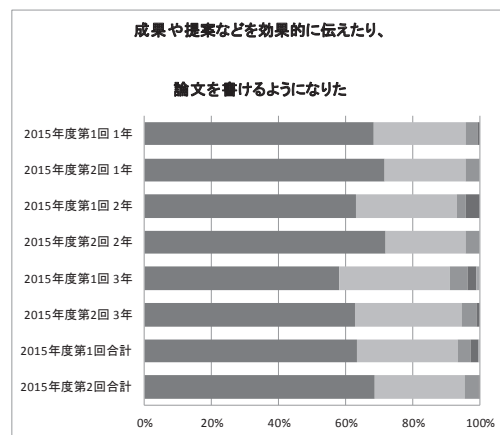
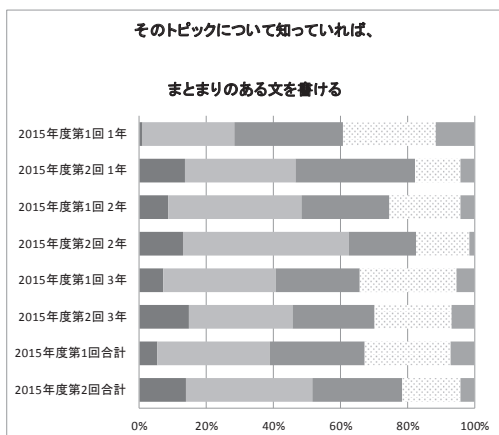
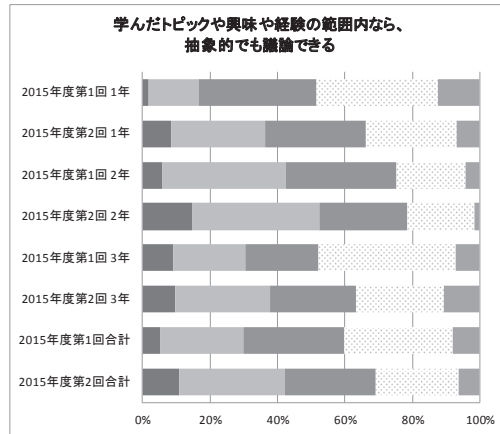
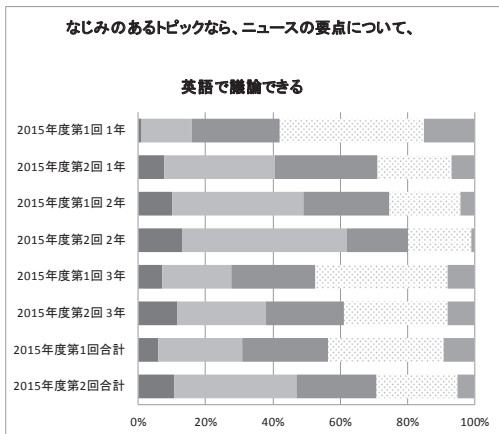
SGH意識調査 アンケート項目

	項目名
	1. 取り組み全般・教養
1	1(1)SGHの取組は、面白そう
2	1(2)今後身に付けたい、伸ばしたい能力や資質
3	1(3)海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい
4	1(4)-1 幅広い教養、進路選択に有効「教養基礎」
5	1(4)-2 幅広い教養、進路選択に有効「選択基礎」
6	1(4)-3 幅広い教養、進路選択に有効「附属高校生向け公開授業」
7	1(4)-4 幅広い教養、進路選択に有効 文理選択をせず学習を行えるカリキュラム
8	1(4)-5 幅広い教養、進路選択に有効 留学生との交流事業
9	1(5)自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたい
10	1(6)SGHの取組は、大学の専攻分野の選択に影響を与える
11	1(7)国際化に重点を置く大学へ進学したい
12	1(8)可能であれば、高校生の時に留学したい
13	1(9)可能であれば、大学生の時に留学したい
14	1(10)可能であれば、海外の大学に進学したい
15	1(11)-1 海外に語学留学(研修)をしたことがある
16	1(11)-2-1 滞在先
17	1(11)-2-2 期間
18	1(11)-3 海外に旅行をしたことがある
19	1(12)-1 「e-ラーニング」を活用できれば使ってみたい
20	1(12)-2 「e-ラーニング」を使用したことがある
	2. 現代の社会の課題に対する関心
21	2(1)「総合的な学習の時間」を通じ、現代社会の諸課題に関心を高められる
22	2(2)現代社会の諸課題に対する興味・関心のある課題
23	2(3)現代社会の諸課題について、もっと学習したい
	3. 課題を発見し解決する力
24	3(1)自主的に探究課題を発見できる
25	3(2)必要に応じて他者と協力して活動を進められる
26	3(3)課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ
	4. 言語活用能力
	4-I 英語を活用する能力
27	4-I (1)英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい
28	4-I (2)-1 ビックが身近であれば、長い話や複雑な議論を英語で理解できる
29	4-I (2)-2 標準的な英語であれば、ネイティブ 同士の会話の要点を理解できる
30	4-I (2)-3 文章の構成を意識しながら、必要な情報を手に入れられる
31	4-I (2)-4 関心の高いビックを、辞書を使わずに読み、相違点や共通点を比較できる
32	4-I (2)-5 綿密な読みが必要な場合、読む速さや読み方を変えて、正確に読める
33	4-I (2)-6 なじみのあるビックなら、ニュースの要点について、英語で議論できる
34	4-I (2)-7 学んだビックや興味や経験の範囲内なら、抽象的でも議論できる
35	4-I (2)-8 事前に用意されたプレゼンテーションを流ちょうに行え、質問にも対応できる
36	4-I (2)-9 デパートなどで、ビックが関心のあるものであれば、主張を明確に述べられる
37	4-I (2)-10 そのビックについて知っていれば、まとまりのある文を書ける
	4-II 日本語を活用する能力
38	4-II (1)成果や提案などを効果的に伝えたり、論文を書けるようになりたい
39	4-II (2)-1 講義の要点や複雑な議論の流れを的確に理解できる
40	4-II (2)-2 文章の構成を意識しながら、必要な情報を手に入れられる
41	4-II (2)-3 関心の高いビックを、相違点や共通点を比較しながら読める
42	4-II (2)-4 記事やレポートなど、目的や必要性に応じた読み方ができる
43	4-II (2)-5 新聞・インターネットやテレビのニュースの論点を見出し、議論できる
44	4-II (2)-6 自分の意見を聴衆の前で述べられ、質問にも応じられる
45	4-II (2)-7 デパートやデパートやデパートなどで、論拠を並べて主張を述べられる
46	4-II (2)-8 考えの根拠を示し、語いや文構造を適切に用いて、論理的な文章を書ける
	5. 論理的な思考力
47	5(1)-1 議論や考察を繰り返しても、課題や主張を見失わずに把握できる
48	5(1)-2 事実であれば、客観的なものであるかを意識してより確かな推論や根拠を立てることができる
49	5(1)-3 主張と根拠の間に飛躍や誤りがないか、不整合な部分はないかを確認できる
50	5(2)-1 議論や考察を繰り返しても、課題や主張を見失わずに把握できる
51	5(1)-2 事実であれば、客観的なものであるかを意識して相手の発表を聞いたり、論文などを読んだりできる
52	5(1)-3 相手の主張と根拠の間に飛躍や誤りがないかを意識して相手の発表を聞いたり、論文などを読んだりできる
53	5(3)論理的な思考力を高めたい
54	5(4)論理的な思考力を身に付けることは将来の役に立つ
	6. プレゼンテーション能力
55	6(1)探究の成果や解決策の提案、意見などを効果的に聞き手に伝えられる
56	6(2)プレゼンテーション能力を高めたい
57	6(3)プレゼンテーション能力を身に付けることは将来の役に立つ
	7. ICTを活用する能力
58	7(1)目的やメディアや機器の特徴に応じ、適切に選択し使用できる
59	7(2)ICTを活用する能力を高めたい
60	7(3)ICTを活用する能力を身に付けることは将来の役に立つ

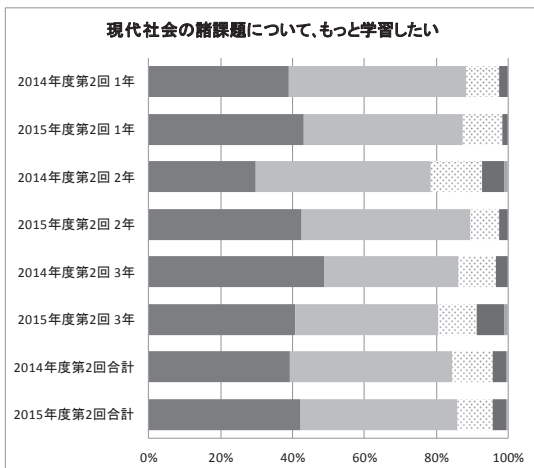
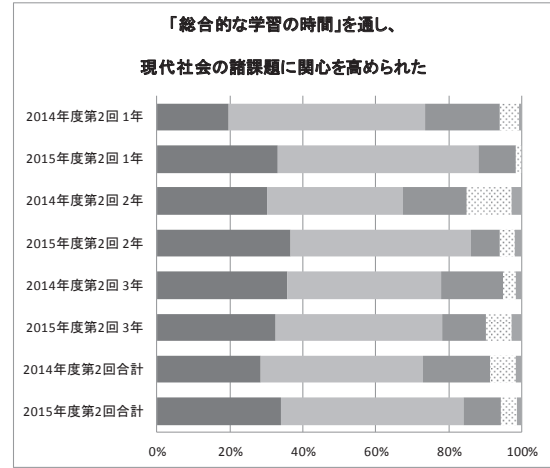
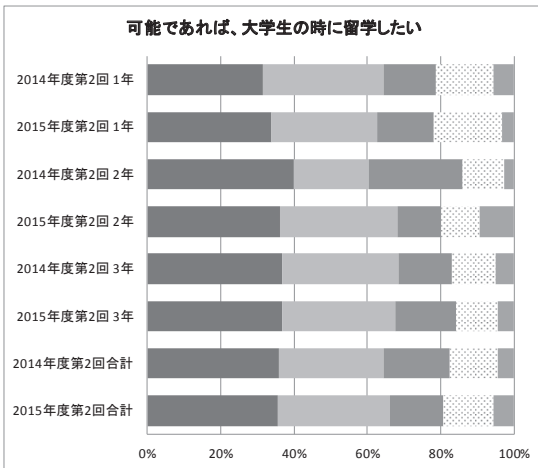
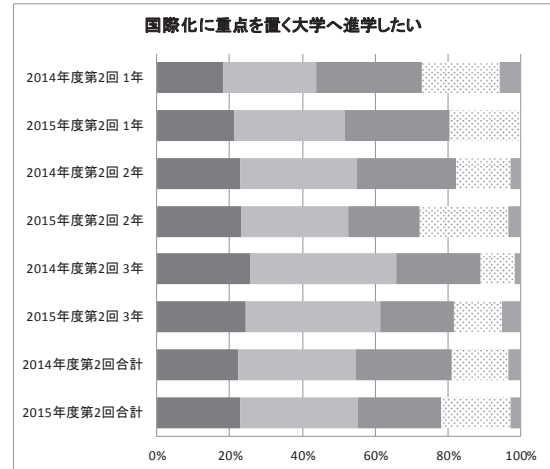
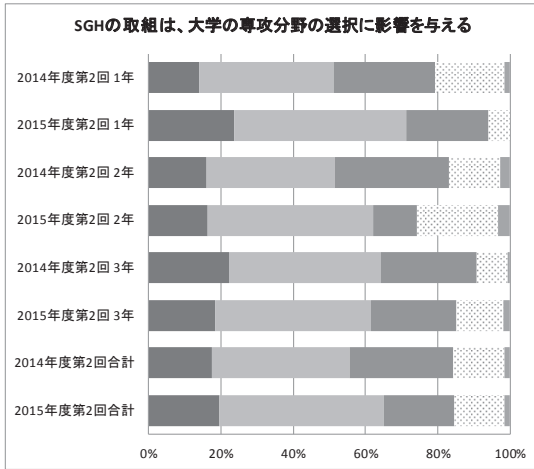
SGH意識調査 集計結果 今年度過回比較 2015年4月(2015年度第1回)ー2016年1月(2015年度第2回)

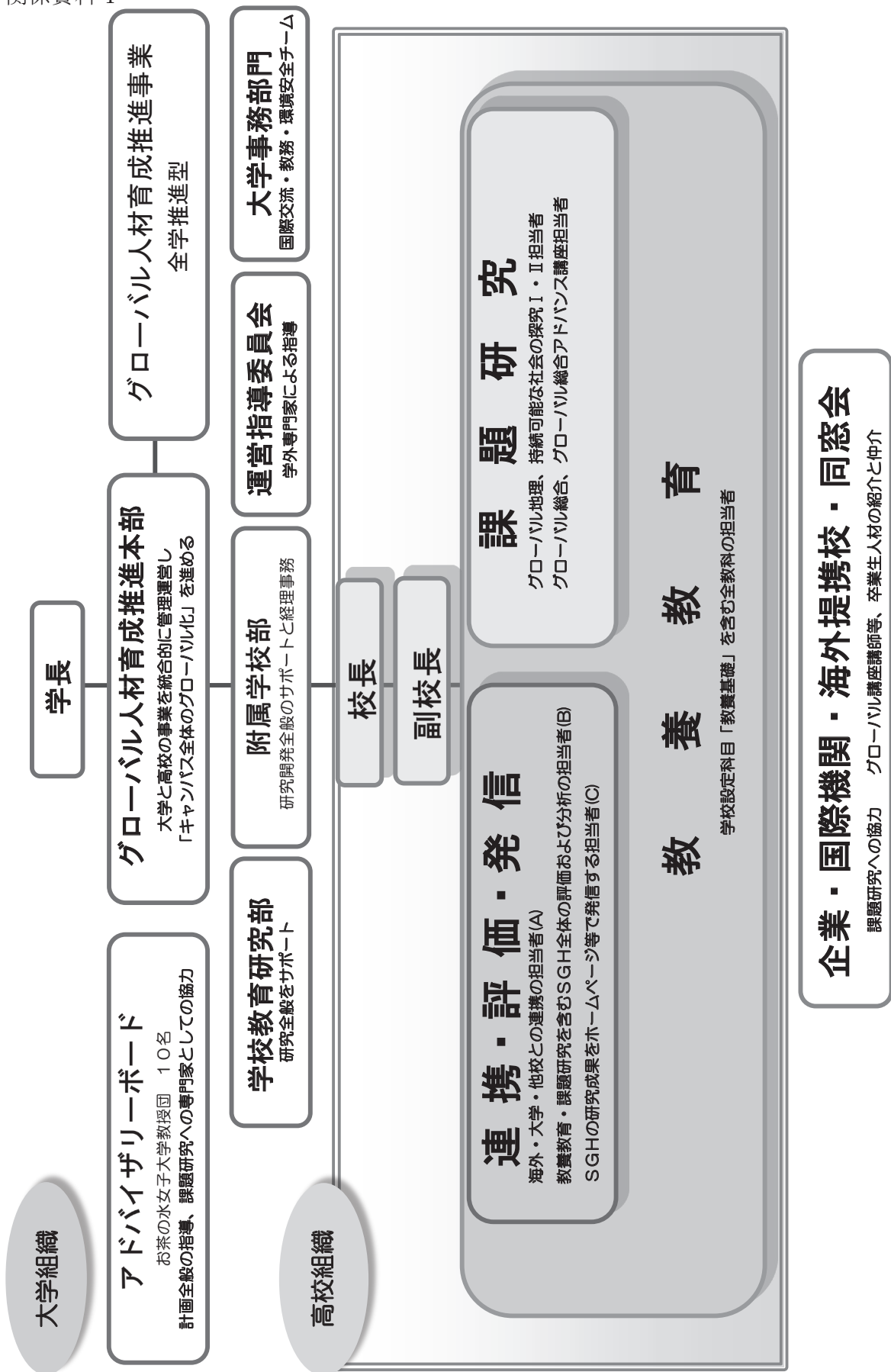
■①大変そう思う ■②ややそう思う ■③どちらとも言えない ■④あまりそう思わない ■⑤全くそう思わない





SGH意識調査 集計結果 前年同回比較 2015年1月(2014年度第2回)－2016年1月(2015年度第2回)





教育課程表

教科	科目	1 年		2 年		3 年	
		必修	選択	必修	選択	必修	選択
国語	国語総合 現代文 B 古典 B	4		2 2		2	
	国語表現 古典 A 甲 古典 A 乙 教養基礎「国語」 I 教養基礎「国語」 II 教養基礎「古典読書」 A 教養基礎「古典読書」 B	2		2			2 2 1
地理	日本史 A 日本史 B 世界史 A 世界史 B 地理 A 地理 B			2 2			1 4 1 4 4
	倫理・経済 政治・経済 公民演習	2				2	2
数学	数学 I	3		3			
	数学 II						6
	数学 A 数学 B	2		2			2 2
	教養基礎「数学」 I 教養基礎「数学」 II 教養基礎「数学」 III	1		1			2
理科	物理基礎 物理基礎 化学基礎 化学基礎 生物基礎 生物基礎 地理基礎	2		2 2			1 5 1 5 1 5 2
	体育	2		2		3	
	保健	1		1			
	音楽 I 音楽 II 音楽 III 美術 I 美術 II 美術 III 書道 I 書道 II	2 2 2 2 2 2 2		2 2 2 2			2 2 2
外国語	音楽表現 美術表現 コミュニケーション 英語 I コミュニケーション 英語 II コミュニケーション 英語 III	4		4		2	
	英語表現 I 英語表現 II 英語会話	1					2 2
	教養基礎「英語」 I 教養基礎「英語」 II 教養基礎「英語」 III	1		1			2
	家庭総合 社会情報	1 2		2		1	
	総合的な学習の時間			1	1	1	
ホームルーム	1		1		1		
計		35		35		12	7~23

教育課程表

教 科	科 目	1 年		2 年		3 年	
		必修	選択	必修	選択	必修	選択
国 語	国語総合	4				2	
	現代文 B			2			
	古典 A			2			2
	古典 A 甲						2
	古典 A 乙						1
地 理	基礎「国語」 I	2					
	基礎「国語」 II			2			
	基礎「古典読書」 A						2
	基礎「古典読書」 B						2
	日本史 A			2			1
公 民	日本史 B						4
	世界史 A			2			1
	世界史 B						4
	地理 B						4
	グローバル地理	2					
数 学	倫理	2				2	
	政治・経済						
	公民演習						2
	数学 I	3					
	数学 II			3			
理 科	数学 III						6
	数学 A	2					2
	数学 B			2			2
	基礎「数学」 I	1		1			
	基礎「数学」 II						
保 健	基礎「数学」 III			1			
	物理基礎			2			1
	化学基礎	2					5
	生物基礎			2			1
	地理基礎	2					5
芸 術	体育	2		2		3	
	保健	1		1			
	音楽 I	2					
	音楽 II			2			2
	音楽 III						
外 国 語	美術 I	2					
	美術 II			2			2
	美術 III						
	書道 I	2					2
	書道 II			2			
家 庭	音楽表現 I			2			2
	美術表現 I			2			2
	コミュニケーション英語 I	4				2	
	コミュニケーション英語 II			4			
	コミュニケーション英語 III						
情 報	英語表現 I	1					2
	英語表現 II						2
	英語会話						
	基礎「英語」 I	1		1			
	基礎「英語」 II						
ホ ー ム	基礎「英語」 III						2
	家庭総合	1		2		1	
	社会と情報	2					
	総合的な学習の時間			2		1	
	持続可能な社会の探究 I						
持続可能な社会の探究 II							
ホームルーム	1		1		1		
計		3 5		3 5		1 2	7 ~ 2 3

平成 26 年度指定 スーパーグローバルハイスクール 第 2 年次
研究開発実施報告書

平成 28 年 3 月 24 日

発行 お茶の水女子大学
附属高等学校

〒 112-8610 東京都文京区大塚 2 丁目 1 番 1 号
電 話 03 (5978) 5856 ~ 7
F A X 03 (5978) 5858

印刷所 株式会社 甲 文 堂
〒 112-0012 東京都文京区大塚 1-4-15
アトラスタワー茗荷谷 105
電 話 03(3947)0844